東方紅更録

吸血鬼@ロマンうどんぬ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

――「死は誰にでも等しく訪れる。偶然に起こったように見えても、そこで死ぬことは必然だったのだ」――――

ごくごく平凡な少年が生まれ変わったところは東方Ｐｒｏｊｅｃｔの世界。そこでどれほど悲惨な事が起きたとしても、それを乗り越えみんなと楽しく過ごそうとするフィーゼル・スカーレットの生き方を描いたストーリー。

リアルが忙しすぎるので不定期となっています。

＊タグなどが告知なく変更する場合があることをご了承ください。

目　次

番外編
番外編2　キャラクター紹介 ―― 1
序章
第零話　「死は唐突にやってくるもの」 ―― 5
第1章
第壱話　「スカーレット家の次女フィーゼル」 ―― 9
第弐話　「姉妹を襲う不幸」 ―― 18
第参話　「新たな試練はなおも姉妹を傷つける」 ―― 24
第肆話　「忘れ去られた郷への移住」 ―― 39
第伍話　「紅き霧は空を染める」 ―― 46
第陸話　「巫女は異変を見逃さない」 ―― 55
第陸点伍話　「紫と次女」 ―― 64
第漆話　「酒は飲んでも飲まれるな」 ―― 66
第捌話　「次女の休日」 ―― 76
第玖話　「魔女と次女の共同研究」 ―― 87
第拾話　「人里への買い物」 ―― 94

番外編

番外編２　キャラクター紹介

フィーゼル・スカーレット

特徴

・レミリア・スカーレットの妹であり、フランドール・スカーレットの姉。

・魔法に関する勉強が好き。

・割と何でもできる。

・体が弱い。

・常に誰に対しても敬語で話す癖がある。

・酒にすごく弱い。

・翼がない。

髪色

・青白磁色寄りの銀色。

能力

・ありとあらゆるものを分離する程度の能力

服装

・白を基調としたもの。

得意な魔法

・日常生活に役立つ類の物

周囲からの呼称

・フィーゼルお嬢様、フィーゼル、フィー、お姉様

フランドール・スカーレット

特徴

・スカーレット姉妹の最年少。

・遊ぶことが好きで勉強はあまり好きではない。

・自分の能力が暴走することを恐れている。

・翼に七色の結晶が付いている。

・自由奔放で普段からあちこちを見て回っている。
・酒類への耐性はやや強め。
・フィーゼルが好き。
髪色
・濃い黄色（金髪）。
能力
・ありとあらゆるものを破壊する程度の能力
服装
・真紅を基調としたもの。
得意な魔法
・魔法についての勉強をしていないため、使えない。
周囲からの呼称
・フラン、妹様

レミリア・スカーレット
特徴
・スカーレット姉妹の最年長。
・勉強は基本しないが、生きていく上で必要な事であれば進んで行う。
・能力を使って、家族が幸せでいられるよう未来を視ている。
・翼は普通な蝙蝠のような形をしている。
・基本的には館内にいて、咲夜と話したり、館内の見回り、ティータイムを満喫したりしている。
・酒類への耐性は強い。
・家族愛が強い。
髪色
水色混じりの青色。
能力
・運命を操る程度の能力
服装
・淡紅色を基調としたもの。

得意な魔法
・構成体の関係で使う事が出来ない。
周囲からの呼称
・レミリアお姉様、レミリア、お姉様、お嬢様
パチュリー・ノーレッジ
特徴
・基本的に図書館から動かず、ずっと本を読んでいる。
・未知の事に触れるのが好きなため、勉強も好き。
・よくフィーゼルと魔法について話す。
・体が弱い。
・図書館に引きこもっていることも相まってか、体力がない。
・スカーレット姉妹とは親友の様な仲であり家族だと思っている。
・召喚した小悪魔と一緒にいる。
髪色
・紫色。
能力
・魔法（主に精霊魔法）を扱う程度の能力
服装
・薄紫を基調としたもの。
得意な魔法
・精霊魔法と呼ばれる様なもの＋日と月に関するもの。
周囲からの呼称
・パチュリー様、パチュリー、パチェ

十六夜咲夜
特徴
・元殺し屋のメイド長。
・家事全般をこなし、なんでもできる。
・紅魔館の財政を管理している。
・しっかり者。
・銀のナイフを扱う。

髪色
・銀色。
能力
・時間を操る程度の能力
服装
・青と白を基調としたメイド服。
得意な魔法
・特になし。
周囲からの呼称
・咲夜

紅美鈴
特徴
・紅魔館の門番をしている。
・見回りに行くと寝ていることが意外と多い。
・武術の達人。
・レミリアに手合わせを願い、いろいろあって今の職に就いた。
髪色
・赤色。
能力
・気を使う程度の能力
服装
・淡い緑を基調としたもの。
得意な魔法
・特になし
周囲からの呼称
・美鈴

序章

第零話　「死は唐突にやってくるもの」

――――とある島国の首都。

僕は、都内にすむ高校生。もう今年で2年目だ。僕はこう考える。今の世界は平和で戦争を放棄し経済力や価値のあるものを作り出すことによって競い合い、その国の中で特技や実技を育てて競い合い成長していく。しかし、その才能に恵まれ無かった者は何をしたらいいのかと。

中には、そんなモノは自分で見つけ開花させるんだという者もいるが、それはその人がなにかしらの形で成功しているからこそ出てくる言葉に他ならない――――と。

この世は、恐ろしく理不尽で退屈で汚い世界であると僕は思う。強者が上でふんぞり返り、弱者が虐げられるという構図は、戦争が終ろうとも終わらない。なぜなら、それは人が他の者の上に立ちたいと願うからだ。その結果、弱者は虐げられ続け這い上がることができないのだ――――――

よ。だったし、あの時の判断は正しかったんだな。と今でも実感する。

「お?ようやく登校してきたか…。ったく、おせーよ、遅刻しちまうぞ?」

「あはは、ごめん。今日はちょっと朝起きるのが辛くてさ。」

「ん?体調でもわりーのか?」

「いやそういう事じゃなくて、単にダルくてさ。」

「あ~あるあるだよな。」

それに今ではそのいじめられっ子と普通に会話するくらいまで、仲良くなったおかげか、僕をいじめっ子と一緒にいじめてきたその取り巻き達からはなぜか敬語で話しかけられるほどになっている…。

そして、最近はいじめっ子だった彼から直々に、敵に襲われた時の対処法を習っている。その練習を持ち掛けられた時の「対処法を教えてやるよ。俺みたいなやつから身を守る方法をな。」にはさすがに笑ってしまった。そんなこともあってか最近は毎日が楽しい。ようやく高校生活が充実してきた。って感じ。

「そういえばさ、こないだ一年部の男子が車にひかれて死んだんだろ?あれ悲惨だよな~。」

「だよね。噂だとその男のものすごくまじめな子だったらしいし、成績もよかったらしくて、学校の先生たちも相当落ちこんでたよ。」

「にしてもホントドンマイだよな。まさか偶然持病で意識を失った運転手が車で突っ込んでくるとか。」

「―ッ!」

「ん?どうした?」

「え?あ、いや何でもないよ。」

「そうか、ならいいけどな。」

なんだろう?今一瞬ものすごい頭痛がしたような気がしたんだけどな…。

キーン　コーン　カーン　コーン

「ようやく昼か~。ったく、ほんと英語の授業つまんねーわー。暇す

ぎ、英語なんて将来使わねーだろ。」
「将来は使うかもしれないけど、確かにあの先生の授業はつまんないよね。」
「だよなー。お前ならやっぱり分かってくれると思ったよ。」
「何言ってんのさw」
「別にいいだろwそれよりさ、一緒にコンビニに昼食買いにいこーぜー。」
「あ、うん。ごめん、僕先にトイレ行ってくるから、行ってて。」
「おっけー。」
――ふぅースッキリした。よし、急いで追いかけよう。最近は以前に比べても格段と幸せだ。ようやく手に入れた幸せを手放さないよう頑張ろう。この充実感に満ち足りた日々を捨てたくは無いからな。っても、手放す方法なんていくらもないか。死ぬか裏切るかだしな。
「お、見えてきた。」
ようやく追いついてきたか。にしても今更だけど昼食買いに行くのっていいのかな？確か校則には昼食を購入する場合購買されている物のみって書いてあっ
「おい――――！横見ろって！そこにいると死ぬぞ!?早く横断歩道を――――」
「え？なn――――」
ドゴッ！
その瞬間、僕の前身はとんでもなく強力な衝撃に見舞われた。しかし、横断歩道で何かに思い切り衝突したのならば結果は見えている。はっきり言ってしまえば気が付くのが遅すぎたのだ。
ものすごい質量体の何かがぶつかってきたのは分かる。視界がぐらぐらする。頭でも強打したのかな？なんだか意識が不あんてぃに――――
そこで僕の意識は暗転した。

そして一瞬の意識の明転

――――――あ……れ…？一体…な……に…が――――――。

何かを思考する間もなく、僕の意識は再び暗転する――――――。

そして意識が戻る頃の彼の目の前には意識を失う前とはうって変わった信じ難い景色が広がっていたのだった――――――。

第1章
第壱話　「スカーレット家の次女フィーゼル」

――――「なんて……わいい……しょう……！」
――――「ついに…まれたか！…の子の名……何にし……か？」
朦朧とした意識の中で微かに聞こえる声。

いったい誰なんだ？まだまだ眠り足りない気分なのにもっと寝かせてほしいのに…。
渋々、目を開けるとそこには見知らぬ男性と女性、それにいくらかの……。なんだあれ？かぼちゃ頭のお化け（？）が3～4人くらいいるな…。ていうかみんな身長デカッ！確か……僕って…あれ？僕って誰？ていうかなんで自分の事僕って言ってるうんだろう？んん？ぼく？私？あレ？全然自分の事を思い出せない、けどこの年ではっきりとした自我があるだけでもマシ？なのか？――――
「決めた！」
!?。なんだ急に…
「もう、あなたったらあんまりにも大きな声を出すものだからこの子がびっくりしちゃってますよ？」
「む？すまんすまん。つい声が大きくなってしまったようだな。」
「まったく、気を付けてくださいね。」
「ああ、レミリアの時みたいにはならんよ。」
一体この男性はなにをやらかしたんだよ…。というか、どう見てもこの男女、両親なんじゃ…？どういうことだ？何が起こった？今、赤ちゃんかな？性別は？レミリアの時みたいってことは姉がいるのかな？う～ん、謎が多すぎるなー。まずなに――――
「それにしても、お前に似てかわいい女の子じゃないか。」
「またそんなこと言って、ほんとは男の子が～とか思ってたんじゃないですか？」
「そんな訳ないだろう。いくら何でも不謹慎というものだ。」

「そうですね…。さすがに不謹慎ですね。次からは気を付けます。ところであなた、何という名前になさったのですか？」
「フィーゼルという名前を付けてみたんだがどうだろう？」
「まあ、とってもよく似合ってますね。私はいいと思いますよ。」
「そうか？それはよかった。これからよろしく頼むぞ、わが娘フィーゼルよ。」
「まったく、大袈裟ですね。」
「ハハハ！ついつい気分が舞い上がってしまうようだ。」
　おんなの子か、これからはしゃべり方なんかにも気を使っていこう。うっかり元の口調でしゃべって「何があったんだ!?」なんてことになったら大変だしな。なんか話しかけてみるか…
「あ……うぁぁ、あ～う～。」
　・・・・・・喋れねーじゃねーか！
　くっそ、完全に失念していたけど喋れないじゃん。…仕方がない。しばらくはこのままのせいかつに慣れていくほかないみたいだし、我慢するか…。あ～喋りにくいなぁ～。

　そんなこんなあって、生まれてから数年たった頃――――
「れみりあおねーさまー、あそんでくだしゃい！」
「フィーったら、ふふ、いいわ。遊びましょうか。」
「ありがとーございあす！」
「ということで、お父様、フィーと一緒に遊びに行ってきます。」
「わかった。くれぐれも気を付けるように、あとフィーにもしものことが無いようしっかりと見てやっててくれ。」
「はい、お父様。」
「フィーもだぞ、自分のことは自分で管理するように。」
「あい。分かりましたおとーさま。」
　まったくそんなことくらい分かっているというのにお父様も心配性ですね。

――――私は完全に女の子としての生活をしっかりと歩んでいた。

というか、それらしいよう振る舞っていたら自然となじんだ、過去(?)の事を思い出せないのも手伝って、女の子としての基本も完璧に身についている。

分かったこととして、

・自分には2歳年上の姉レミリアがいること。

・自分が吸血鬼だということ。

・かぼちゃ頭のお化けたちの正体は新しく生まれてくる赤子(私)が泣かないよう配慮し、変装をしていた配下の吸血鬼だったということ。

・この家の家名はスカーレット家だということ。

ぐらいだ。

そして普段からは敬語を使って過ごしている。ここでの暮らしはそこいらの家々と比べると天と地のような差がある。食事の際は一家そろって食堂でいただくし、館自体がとても広い。館の名前は紅魔館というそうだ。メイドがたくさんいて、身の回りの世話を何でもやってくれるので1日中遊んでいられる。それと、最近妹ができた。フランドールスカーレットという。かわいい妹で、金色の髪に真紅の瞳をしている。が、生まれ出る際にお母様の子宮を破るかのように出てきたため現在原因を調べるためと、近づくのは危険かもしれないということで、現在は地下室に軟禁されていると聞いている。正直可哀想だ。だけどわがままを言うわけにはいかない。最近はお父様も大忙しのようで、よく見ると目の下にクマができてしまっている。体調を崩されないといいんですけどね。それと今はあまりにも暇なのでお姉さまに遊んでほしいとお願いをしているところなんです――

――

「でもね、フィー。」

「なんですかぁ?」

「遊ぶといってももうほとんどの遊びはやってしまったじゃない。かくれんぼも鬼ごっことかもひと通り遊んでしまったでしょう?」

「むむむ~。おねーさま、新しい遊び考えて~。」

私の無理強いにお姉さまは笑いながら答えるてくれる。」
「無理よ。これ以上はもう思いつかないわ。」
「うー。仕方がないので今日の所はあきらめます…。」
「ごめんなさいね。また今度何かしら考えておくわ。」
「ほんとですか!?」
「ええ。」
「やったー。おねーさま大好き!」
「フィー?どこいくの?」
「お部屋!本読んでるね!」
「分かったわ。」
そういって私は笑いながらお姉さまのもとを去る。私が不安にならないようお姉さまが気遣ってくれているのだから、もっと笑っていないと――――

□ □ □ □ □ □ □

私が新しい遊びが思いつかないことを告げるとあの子ががっくりと気落ちしていたので、つい何か考えておく
と約束をしてしまった。どうしようかしら。
「レミリア、今時間空いているか?少し付き合ってほしいんだが…。」
「分かりました。お父様。」
「フランの事についてだ……。」
「お父様?」
「ああ、すまん。実はとんでもないことが分かってな。フランの事なんだがあの子の能力は危険すぎる。」
「もう能力が分かったんですか?」
「ああ、様々なことを調べて確信した。あの子の能力は…。”ありとあらゆるものを破壊する能力”だ。もう”程度”なんて生易しいものではない。そしてあまりにも危険すぎる。正直、私としても心苦しい決断ではあるが、フランを地下室に幽閉することに決めた。」
「そんな!?」
「本当にすまない。しかし今の私には現状を解決できるほどの力がな

いんだ！」
　お父様がここまで言われるとは、そんなに切羽詰まった状況だったなんて…。
「お母様は!?フランと一緒にいるということはお母様が危険なのでは…。」
「すまない。これはまだ言うつもりでは無かったんだが、お母さんは、助からなかったんだよ。」
「そんな…。グスッ…。」
「本当にすまない！」
　そういってお父様は私を抱きしめてくれた。そんな私は涙が止まらなかった。
「あああああああああ！おかーさまあああああ！ぐすっ！うわあああああああん！あああああああ！」
□　□　□　□　□　□　□
「？」
　今、お姉様の声が聞こえたような…。気のせいだといいけどな。普段お姉さまは滅多な事では泣かないから、お姉さまが泣くということはよっぽどの事があったということなのかもしれない。そう考えるとなんだかとても嫌な予感がしてきた。何も起きていないといいけど…。ダメだ、やっぱり気になる。どうしよう。
　コン！コン！
「？」
「フィーゼル、少し話がしたい」。中に入ってもいいかい？」
「どうぞ、おとーさま。」
　そういって私はお父様が入れるようドアを開ける。
「実はね、さっきレミリアにも話したんだけど。」
「！」
　やっぱりさっきのお姉様の声は聴き間違いじゃないのかも。
「？　どうかしたかい？」
「ううん。なんでもないよ。」
「そうか。ならいいんだが。」

「それで、お話って？」
「ああ、実はフランの事なんだが、あの子の能力はなんでも壊してしまうとても恐ろしい能力だということが分かってね。もう私の力のみではどうすることもできないんだ。だから、心苦しいが…フランが自分で能力を制御できるようになるまで、地下室に幽閉することにしたんだ。本当にすまない！」
一瞬お父様が何を言っているのかが分からなかった。けれどそんな受け入れがたい真実を告げられたにもかかわらず私の頭は自分でも驚くほどにスッキリとしたクリアな感覚だった。
「そう…なんだ。」
「それとな…お母さんの…ことなんだが。フランが生まれた後手を尽くしたんだが、間に合わなかった…。すまん。私が不甲斐ないばかりに…。」
これには流石に泣きたくなるけれどお父様がここまで謝ってくれたのに私が泣いたらダメだ。そう考え、グッと涙をこらえる。なるほどこんな事実を急に告げられたらお姉様だって泣いてしまうだろう。
「だから、すまないがしばらく地下室に近づかないようにしてくれないか？」
「え？私とおねーさまは地下室には近づいてｎ」
「フィーゼル。嘘をつくのは駄目な事だと言っただろう。」
「はい、おとーさま。」
まさかバレていたとは思わなかったいつもお父様がお仕事をしている最中を狙ってお姉様と行っていたのに。でもこの判断は正しい。しばらくフランと会えないのは残念だが。仕方がない。私としても何か解決策を考えよう。
そんな、スカーレット家を悲しませた事件から数日後。
「フィー、今日はね。魔法について教ええようと思うの。」
「まほーですか？」
「そうよ。魔法っていうのは、私たち妖怪の中だと自分の妖力を構成する色素の中に含まれる〝魔〟の部分が強く出た妖怪だけが使えるもので、私は使えなかったけどもしかしたらフィーなら使えるかもし

れないの。だから今日はその確認もかねて魔法に関する勉強をしましょ？」
「うん！」
　私はお姉様から魔法について教えてもらう事になった。お姉さまは本当に優しいなあ。
「おねーさま大好き！」
「ふふ、ありがとう。じゃあ図書館についたらまずは周りを見回してみなさい。魔法に適性があるなら魔法について記されている本を見るとなんか青紫色の靄のようなものが見えるらしいわ。」
「うん！分かった！」
　そんな他愛もないことを話していると…
「ついた！」
　っておお！ほんとに何かあちこちの本にもやもやがあるぞ。
「もやもやは見えそう？」
「うん！なんかもやもやしてる！」
「そう。じゃ魔法を選びましょうか。もやもやがある本を取っておいで。」
「はーい。」

３０分後。

「こんなにも魔法書があったのね。」
「おねーさまどれにしたらいいの？」
「うーん。フィーが使いたい魔法を選んだら？って言ってもどれがどれだか分からないか…。とりあえず片っ端から読んでいきましょうか。適当に本を取って見ていきましょ。」
「どれがいいかな。これに決めた！」
「どれどれ。う～ん、どうやらこれは植物に関する魔法みたいね。」
「どーゆーこと？」
「例えば、お花の成長を早くしたり、植物を進化させたりする魔法が載ってるわね。」

「う～んでも植物はいいかな～。」
「そう。ならこれは？」
「どれ～？」
「この魔法書よ。」
「なんか変な生き物が描かれてるね。」
「どうやら、簡単な生き物を作り出す魔法みたいね。」
「ん～？」
「例えば、影とか水とか形がはっきりしないものを生き物みたいにするってこと。」
「なるほどー！おねーさまこれがいい！」
「分かったわ。これから一緒に頑張りましょ？」
「うん！」

そんな感じでしばらくは魔法の勉強が続いた、途中から飛行の練習なんかも入ったりしたが、滞りなく順調に日々は過ぎていった。

――3年後。

「お姉様、今日は何して遊びますか？」
私がウキウキしながら訪ねるとお姉様はいつものように優しく微笑むように答えてくれる。最近ではしっかりとハキハキ喋れるようになったためお姉様も聞き取りやすそうだ――――というのも2年程前私が早口で喋るものだからお姉様がうまく聞き取れず、『一緒に遊んでください。』が『一緒に亜音でください』と聞こえたらしく、意味が分からなくて勝手に解釈した結果、なぜか『一緒に亜音速で来てください』に変化し猛スピードで移動しようとする→突っ立ったままの私に突進→私、気絶という事件が発生二人そろって、お父様に怒られるとなったのだ。とそんなことは置いておいて、今はお姉様の話に集中しよう――――
「そうね。今日はまたこっそりフランに会いに行きましょうか。」
「分かりました！」
2日ぶりだ、また悲しくて泣いているんじゃないかな。早く会いたいな。

あれからもフランは能力を制御できないらしく、今も地下室に幽閉されているらしい。何とか助け出したいが、お父様にはもう少し安定するまでだめだ。と釘を刺されているので、今すぐにとはいかないのだ。私にもう少し力があれば…。と今でも思ってしまう。でも、今から会いに行くわけだし、その際にフランにも頑張ってと伝えよう。

「じゃ、行きましょう。フィー？」

「はい！早く行きましょうお姉さま！」

「そうね…。早く行きましょう。」

なんかお姉様の顔が一瞬だけ険しくなったような気がする。気のせいだろうか。

そんなことを考えながらも私とお姉様はは地下室へと向かう。しかしそこには余りにもひどい光景が広がっていた。そして、この時の私たちにはまさかあのような形でお父様が死ぬなどとは思いもしていなかった――

第弐話「姉妹を襲う不幸」

「……！…かげ…にし…よ！」

中から激しい声がする。すごく…怒っている？なんだか嫌な予感がする。

そして私は走り出した。

□　□　□　□　□　□

「え!?ちょっと、待ちなさいフィー！」

「ごめんなさい、お姉さま先に行きますね！」

そういってフィーは走って行ってしまった。やっぱりさっき見た運命が実現してしまっているのかも…それはマズいとりあえず私も急ごう。

「はや…自分で制御で…るようにならないか！」

「！」

少し走ると、聞こえ出したすさまじい怒声。フィーが急に走り出したのはこれが聞こえたせいか…でもこのままだとフィーも危ない。それにお父様がどうしてこんなにも怒っているのかも気になる。早く止めに行かないと…。

そこまで考えると私は一度考えるのをやめ、急いでフィーの後を追った。

□　□　□　□　□　□

バン！

「お父様！やめてください！フランを…。フランをいじめないでください！」

私が急に部屋の中に入ってきたのを見て、お父様もフランも少しばかり驚くかのように、目を大きく見開いてこちらを見てきたが今の私にはそんなことはどうでもよかった。まず目に映るのは、あちこちの服が破け傷だらけの姿となっているボロボロなフラン、それとそんなフランを怒った目で睨み付けるお父様の姿。次に、床に散乱した人形や玩具などだ。しかしどうしてお父様はこんなにも怒られているんだろう――

「フィーゼル、離れていなさい。フランは危険だ。何でもかんでも破壊してしまう。そう、きっとお前たちもこいつに……！」
「え？」
予想もしていなかったお父様からの忠告に思わず、え？と言ってしまった。それに、今フランの事を『こいつ』って…。
そんな状況に疑問符を浮かべ、考え込んでいると――
バシッ！
「いたっ！」
「やめてください！お父様！」
フランが突然お父様の持っている棒で叩かれるのを見た瞬間私の体は自然とフランを庇うようにフランとお父様の間に割って入っていた。
「フィーゼル、お前もこの私を怒らせたいのか!?」
「私からもお願いするわ、お父様どうかやめてもらえませんか？」
お父様が鬼のような形相で私を怒鳴りつけようとしている最中にお姉様がお父様の怒声を遮る形でお父様にお願いをした。しかしその威圧感は――私からしてみれば――とてもではないがお願いする側のそれとは遠くかけ離れた何かだった。
「どうしてお前たちまで私に逆らう…？私…いや、俺はお前たちのために！」
「お父様、私たちのためにとおっしゃるのであれば、まずはフランへの虐待をやめてもらってもいいですか？」
お姉様は淡々と続ける。
「そもそも、フランに能力の制御をさせるのであれば、私たちにだって多少はお手伝いで来たんじゃないですか？お母様がいつも言っていたじゃないですか、一人で抱え込まないでと。」
しかし、お父様の堪忍袋の緒はここで切れた――
「いい加減にしろ！どいつもこいつも！どうして俺の言ってることを分かってくれないんだ！」
「だからお父さま」
お姉様が反論しようとしたその瞬間。

「だまれ！」
「ぐ……がはあ！」
お父様の拳が、腕がものすごい速度でお姉様のお腹に吸い込まれていったのだ。
そして、こちらに振り向き駆けようとしたところで…。
「お姉様たちをいじめないで！」
私たちが部屋に入った時からほぼ一度も口を開いていないフランが急にそう言ったのかと思えば「私はお姉様たちを傷つけたあんたの事絶対に許さないから！えい！」
と凄まじい怒気を込めてそう言い放ち手をお父様に向けて握りしめた。その刹那――
「ぐう！きっさまあああああああ！」
ボン！びちゃびちゃ！ぐちゃあ！そんな音を立てて爆発四散したのだ。そのあまりの光景に私は絶句した。が、おびただしい血の量に血の気が引いてそこで気を失いそうになる。しかしそんな中でもうつむいたままのフランにどうしても伝えたいことがあった。
「フラン、助けてくれ…ありがとう。それと、いま…まですぐに助けてあげられなくて、ごめんな…さい。」
そう告げると、今度こそ私は気を失った。
□　□　□　□　□　□
「んぐ…」
気絶してしまっていたのか？たしか最後は…。ぐ…お腹が…。ある程度再生したとはいえどど、お父様の一撃なのだそうそう治るはずがない…。フィー…フィーは!?部屋を見渡すとそこには……。
一面血と臓物で溢れかえっている床と、その床に倒れるフィー。そして、
「お姉様！お姉様！」
と必死にフィーを起こそうとしてるフラン。そしてお父様も……――この床に散らばった大量の内臓を見て――――もうこの世にいないことは理解しているが理解できない。
体がそれを、理解することを拒否している。

「――ッ。」
駄目だ。涙が溢れてくる。意識するな今はフィーを助けるのが優先。意識するな。意識するな。意識するな――
そんな自分との葛藤が始まって数十分経ったかのように感じられたレミリアはスイッチを切り替えなんとか自分がこの館の主になったんだということのみ理解した。いや、無理矢理にでも理解しなければならなかった。そうせざるを得なかった。なにせ、父親の事を思い浮かべると涙が留まるところを知らぬと言わんばかりの勢いで出てきてしまうのだから。
そして、今の部屋の状況も少しばかり変化している。まず初めにフィーは新しい服に着替えさせた後に、自室のベッドに寝かせておいた。そして、とりあえず今この紅魔館にいるのは自分たち姉妹だけなので地下室の床はそのままだ。正直こんな部屋でフランと話すのはすごく嫌だが、暴れだしす事も考慮し――しかも片付けてくれる人がいないという事もあるので――仕方なくここで話をした。まずは、なぜあのような事になってしまったのか？ということから――

――

１０分程前…。
「それで？どうしてあんなことになったのフラン？正直に答えて？」
と私はフランを不安にさせないよう微笑むように尋ねた。フランはその時を思い出すかのように少しだけ顔をしかめて話し出した。
「あの時は、お父様が私に友人の吸血鬼だと紹介してきて、あいつに私が能力を制御できるよう指導してやってくれって頼んでここを出て行ったの。そしたらあいつがね、お父様がいなくなった途端に急に私を舐め回すようにジロジロと見てきたもんだから気持ち悪くて、つい嫌だなって言っちゃったのそしたら、急に私に襲い掛かってきて……ぐすっ。」
「無理はしなくてもいいから話せるところだけでも教えて。」
「うん…それでね、そいつが急に襲い掛かってきたもんだから、反応できなくて、相手に先手を取られたせいで私はあいつに馬乗りにされて…さしたらあいつがいきなり体を弄(まさぐって)って来たりしたもんだから、抵抗

しようとして勢いで…その…殺しちゃったの…。」
「…。」
正直言葉が出なかった。勢いで殺す？仮にも相手は同じ吸血鬼だというのに？とんでもないなと心の底から思えてしまうほど私は驚いていた。そしてフランは話を続けた。
「そしたらね、お父様がその私たちの暴れる音を聞きつけたんだと思う。急いで来て、あいつの死体をしばらく見てたと思ったら『せっかく、お前のために良かれと思って呼んだのに！』って怒って…。それで――――」
「もういいわフラン、大丈夫だから。」
そういって私がフランを抱きしめるとフランはしばらく泣き続けたのだった…。
□　□　□　□　□　□
「…ん…んぅ？」
ここはどこだろう、とってもフカフカですごく寝心地がよくて、いつまでも眠りたくなる。お姉様はどこに行ったんだろう？いつもだったら、もう起こしに来てる頃なのに。早くまたフランに会いに行きたいな～。…フラン？おかしい、フランには昨日会ったはず…。
!!
そうだ、全部思い出した。昨日私は…最後なんで倒れたんだっけ？今はそんなことよりもフランが心配だ。何もされてないといいけど。
そんなことを考えつつ私はテキパキと身支度を整え地下室へ急ぐ。
「…丈夫だ……ね？」
中からお姉様の声が聞こえる良かったまだいるみたいでも、お父様の声が…聞こえない…。まさか…ね。
ガチャ。
「お姉様！フラン！大丈夫ですか!?」
「フィー…。案外早かったわね。私もフランも大丈夫よ。」
「うん！大丈夫だよお姉様！」
「そう。良かったです。」
そんなことを口にしながらも私はもう既にお父様が死んでしまっ

ていることを自然と自覚した。なぜか何も感じなかったあんなにも大好きだったお父様が死んだのに、どうしてか、気にも留めなかった。
「フィー、とても残念な知らせよ。実は…お父様ｇ――――」
「死んでしまった。ですよね？」
「フィー…。どうしてあなた…。そんなに笑っていられるの？」
「え？」
自分の顔に手を当てる。確かに笑っている…。まるで自分ではなくなってしまったみたいに…。
□　□　□　□　□　□
その後、この館をめぐり様々な親戚たちが互いを殺し合った。そして決まったのが、この館の主はお姉様。そしてしばらくは代理でおじ様が主を務めるとのことらしい。
しかし、このおじ様が私を苦しめる悪魔であったこと、そして私にとっての人生で最もきつく、厳しい試練をもたらす存在であったことに私は気が付く事が…出来なかった

第参話　「新たな試練はなおも姉妹を傷つける」

「今日から紅魔館の当主代理になる、ロレメア・タイロルド…いや、スカーレットだよろしく頼む。」

――――パチパチパチ。伯父様が自己紹介をすると周りにいた吸血鬼たちから拍手が起こる。皆、伯父様の配下に当たる吸血鬼たちだ。今は、伯父様の当主代理就任と凄惨な殺し合いでの勝利を勝ち取った祝勝会を兼ねたパーティーの最中だ。

そして伯父様の挨拶が終ったので今度はこちらが挨拶をする番だ。まずお姉様からだ。

「紅魔館当主レミリア・スカーレットよ。以後お見知りおきを。」とお姉様はスカートの裾を掴んで少し持ち上げ優雅に挨拶をする。

次は私の番。やっぱり緊張しますね…。お姉様のを見よう見まねでだけど真似しよう。

そんな私の心中を察したかのようにお姉様は私にしか聞こえないような声で、

「私の真似をする必要はないわ。いつも通りの挨拶で大丈夫だから。」

と言ってくれた。これだけでも緊張が解けるような気がするが、今解けたらだめだと自分に言い聞かせ、挨拶を行う。

「スカーレット家の次女フィーゼル・スカーレットです。よろしくお願いします。」

と手を下腹部で重ねてお辞儀をして戻る。

良かった…出来た。次はフランの番ですか…。頑張ってください。フラン！

と心の中でフランを応援したが、どうやらそれは杞憂だったみたいだ。なぜならフランは緊張するような素振りさえ見せず、

「三女のフランドール・スカーレットだよ。よろしくー！」と言うだけ言ってあっさり戻ってきたからだ。

フラン恐るべしと思ったのはここだけの秘密だ。

――――そのあと配下の吸血鬼の中でも上位に位置する幹部の人たちの自己紹介が行われたが、それは私が考え事をしている間に終わってしまっていたのだった。

□　□　□　□　□　□

――――自己紹介を兼ねたオープニングセレモニーが終わる少し前。

う～ん…。マズいですね…。伯父様の配下の吸血鬼たちが多すぎます。当主代理なんて言ってましたけどその気になったら私達なんて一瞬でやられてしまうでしょうし…。何か手を打たないと。こんな時に自分に何か能力があればといつも思いますけど、やっぱ私にはないんでしょうか…。このことも含めて、このパーティーが終わったらお姉様に一度相談してみましょうか。後、他にも…

「……イー。…フィー。フィーってば。」

「えっ？…あ、はい？なんですか？お姉様??」

「なんですか？じゃないわよ。オープニングセレモニーも終わったし、今はこのパーティーを楽しみましょう？」

「あ…はい。分かりましたお姉様。」

本当だ。いつの間にか自己紹介終わっちゃってる。熟考しすぎましたか。気が散りすぎかもしれないですし、今はパーティーに集中した方がよさそうですね。

□　□　□　□　□　□

あ～ようやく自由時間だ～。すごく暇だったな～。まあ、今も暇っちゃ暇だけど…。

あ、お姉様だ。構ってくれないかな～。ちょうど、今レミリアお姉様いないし、少しくらいいたずらしてもいいよね。

そ～っと近づいて……。今だ！「わっ！」

そう言いつつお姉様に背後から抱き着いてみる。
「ひゃあ!?」
すると案の定フィーゼルは突然のフランの襲撃に驚きかわいい悲鳴を上げる。それを見てフランはにやけるのだった
お姉様かわいいなぁ～。もう、にやにやしちゃう。あ、レミリアお姉様がこっち来てるにやにやしてるの見られたら絶対何かしたってばれちゃうし早くやめないと。そう自分に言い聞かせ、一人にやにやを抑えようとフランは頑張るのだった。

□　□　□　□　□　□

まったく、フランにも困ったものです。急に驚かせて来るなんて…。もう周りから見られちゃってるし、恥ずかしい…。絶対後で仕返ししてやります!
そんなことをフィーゼルが決心しているとレミリアもこちらに来て姉妹三人ようやく終結だ。
先ほどから伯父様とずっと話してましたけどもう、いいんでしょうか…。
「あの、お姉様?伯父様と何か話されてたみたいですけど、もういいんですか?」
「ええ、もう大丈夫よ。必要なことはひと通り話したわ。」
「そうですかそれならいいんですが…。それと後でお姉様に相談したいことがあるんですけど、時間ってあいてますか?」
「いいわよ。後で、私の部屋に来なさい。」
「分かりました。」
その他、他愛もないことを話しているとフランが背中に何かを隠してこちらにやってきた。
「ねえ、レミリアお姉様とお姉様。私、これ飲んでみたいんだけどお姉様たちも飲まない?」
「う～んと、これは…。ワインですか…。私は遠慮しておきます。まだ、飲んだこともないですし、何か起きたら大変ですし。」
「そうね、私も同感だわ。フラン今日はやめておきなさい。フィーの

言う通り、何か起きた後では遅いでしょう？」
「え～。いいじゃ～ん。」
「フラン、私からもお願いします。今回はやめておきませんか？」
「む～。お姉様までそう言うなら。」
　残念そうだけど、何とかやめてくれたみたい。よかった。それはそうと、なんかお姉様が納得いかなさそうな顔してますね…。
「…。フラン、私とフィーの対応の仕方違くない？」
「え!?いや…そ、そんなことないよ？」
「怪しいわね…。まあいいわ、これ以上話しをしていても何か起きるわけでもないし、パーティーを楽しみましょう。」
「そうですね。」　「そうだね。」
　と姉妹の話し合いはレミリアの提案を以ってお開きとなり、三者三様の楽しみ方をしてパーティーは終わったのだった。

　――同日早朝前。
「お姉様お待たせしました。」
　とフィーゼルがレミリアの部屋を訪ねると
「本当に遅いわよ…。これ以上来るのが遅かったら寝ていたわよ？」
　とレミリアは少し呆れたかのような言い方で微笑んで見せた。――それは、そう言ってはいるが本気ではないという事を表すレミリアなりの気遣いだ。
「すみません。」
「それで話って何かしら？」
　そして、レミリアはフィーゼルに話をするよう促す。
「実は、パーティーが始まった頃から思ってたんですけど、少し伯父様の配下が多すぎる気がして。何か起こってからでは遅いので、それについてお話ししようと思ってたんです。」
「なるほど。それについては私も少し思うところがあったのだけれど、今はまだ何もしない方が賢明なのよ。」
「え？どうしてです？」
「言い方を変えれば、何もできないのよ。それはさっきあなたが言っ

ていたじゃない。”配下が多すぎる”って。」
「あ…。」
　そういう事ですか…。お姉様に言われないと気が付けないなんて私もまだまだですね。
　つまりレミリアが言いたいのは、何事も行動するにはまず敵の幹部や頭を潰さなければならないが、配下が多すぎるがために、そこまで辿り着けないという事なのだ。
「分かって貰えたみたいね。」
「はい。それにそういう事なら仕方ないですね。しばらく様子を見ましょう。何か動くにしても、そんなすぐには動かないとおもうので。それでも、もし私に何かあったら私を信じて待っていてくださいよ？」
「分かったわ。じゃ、今日の所はここで終わりましょう。フィーあなたも早く寝なさいよ？もうすぐ日が昇るわ。」
「分かりました。それではお姉様、おやすみなさい。」
「ええ、おやすみなさい。」
　相談も終わり寝ようとする二人の見立ては大きく外れていた。それは、二人の勘が鈍い訳ではなく、ただ単にロレメアに関する情報不足が原因だった。その情報とは、ロレメアが完璧主義者であったことだ。

□　□　□　□　□　□

　薄暗く明りの灯る、とある部屋でロレメアは配下に尋ねた。
「吸血鬼は染める側か染められる側か、お前はどちらと考える？」
「決まっております。当然、染める側でありましょう。」
「その通りだ。吸血鬼は相手を紅く染める血の支配者。はたまた、人間の住処を闇夜に染める闇の王だ。それ故に吸血鬼の一族は皆、髪や瞳が染まらぬ紅や紫、黒などの色をしていなければならない。だが、スカーレット家の次女と三女あの二人はなんだ？銀髪に金髪どちらも、けしからん。お前もそうは思わないか？」
「…はっ！その通りでございます。」
　よく見ると吸血鬼の配下は下を向きながら震えている。それは、あ

の姉妹が恐ろしい訳でも、自分の主の怒気のこもった声を聞いたからでもない。震えている理由は、主の顔が怒りのあまり、まさしく鬼のような――――配下である自分が今までで一度も見たことがない――――顔をしていたからだった。生物の根源から恐怖を呼び覚まされるような悪魔の顔をした主は続ける。

「それに、次女のフィーゼル・スカーレットが先のパーティーで振る舞われた料理に使われていた血に一瞬臆したのを私は見逃さなかった…。そんなことはあってはならない…。なぜなら、吸血鬼は……血の支配者だからだ。」

完璧主義者のロレメアには吸血鬼が、血に怯えるというその事実が許せない。そしてロレメアはたとえ相手が死のうともそれを直そうと努力する。自分の顔に泥を塗らないように、一族が舐められることが無いようにするために…。

□ □ □ □ □ □

――――翌日

「フィーゼル。君は後で私の部屋に来てくれ、話があるんだ。」

「は、はい分かりました。」

急に話しかけられたものだから思わず勢いで了承してしまったけど、何の用だろう？私何かしましたっけ？

「何の用なのかしら？」

「私にも思い当たる節はありませんね。」

「じゃあ今行ってきたらどうかしら？別にこれからする事も無いし。」

「そうですね。では行ってきます。」

レミリアと別れてからしばらくすると、ある一つの部屋が見えてきた。元々は彼女たち姉妹の父が使っていた部屋だ。

コンコン　ガチャ

「失礼します。」

「ああ、よく来たね。じゃ、そこに掛けてくれ。」

「はい。」

一体何の話をするんでしょう？

そんなことを考えつつフィーゼルが椅子に近づいたそのとき。
「!?　ぐぅ…。」
フィーゼルを突如強大な衝撃が襲った。それをもろに受けフィーゼルは横に大きく吹き飛ばされる。
「ほぅ。今のを受けてまだ意識を失っていないなんて、子供ながら大したものだ。」
対して、フィーゼルを嵌めた当の本人。ロレメアは愉快そうに笑っている。
「残念ながら、眠って貰うよ。」
ドスッ
フィーゼルの意識はここで途絶えた…。
□　□　□　□　□　□
「ここにレミリアを呼べ。」
「はっ！」

ロレメアの一言で配下たちは動き出す。しばらくするとレミリアの声が聞こえだした。
「ちょっと。引っ張らないで、服が破けてしまうでしょう？まったくもう何なの…。」
少しばかり呆れてもいるようだ。
「失礼します。何の用かしら、ロレメア当主代理？」
「はっはっはっ。皮肉かい？だがそんな事はどうでもいい。」
レミリアは、何が言いたいのかわからない、と言いたそうな顔をしているが次の瞬間その顔は引きつったものへと変化する。次の瞬間放たれたロレメアのある一言によって…。
「実は先ほどフィーゼル君を呼んだときにね、どういうわけか急に暴れだしてね、今は傷も癒えたがそれはもう凄い大怪我を負ってしまってね。以上の経緯から、フィーゼル・スカーレット君をしばらく我々の管理下で地下に幽閉することに決めたのでよろしく頼むという話をするため、君をここに呼んだんだが…。何か不満そうな顔をしてい

るね？」
「そんな…まさか…。そんなことは絶対にありえないわ！フィーは急に暴れだすような子じゃないもの！」
「まあまあ、落ち着きたまえ、しばらくと言ってもそんな長期間ではないよ。フィーゼル君が落ち着くまでだ。」
「けれどフィーは本当にそんな事をするような子じゃないわ！」
そうレミリアは叫ぶと、ロレメアめがけて飛び出そうとするが、ふと頭によぎるフィーゼルの言葉に思い留まった。
”もし私に何かあったら私を信じて待っていてくださいよ？”
ここで行動を起こせば、フィーゼルを信じてあげられなかった所か、この館内でのスカーレット家の立場すら無くなってしまうと考えたのだ。
「おや？かかってこないんですか？」
ロレメアは愉悦そうな表情でレミリアを挑発するが…。
「ええ。今日の所は何もしないでおくわ。私はあの子を信じているから。」

そう言い残してレミリアは去っていた。後日同じことを聞いて大暴れしたフランドールも幽閉されてしまったが、レミリアはそれでも動かなかった。ただひたすらに自分の妹たちを信じて…。
□　□　□　□　□　□
――翌日
ここは？一体どこなんでしょう？たしか伯父様の部屋で不意を突かれて…。
ジャラ　ジャラ
え？これは足枷？なんで…。
コツ…コツ…コツ……コツ
「おや？目が覚めたかい？」
「お、伯父様？どうしてこのようなことを――」
「黙れッ！」
!!!
!!

「えと、あの。」
「黙れと言ってるのが聞こえないのか!?」
「…。」
「私はね、フィーゼル・スカーレット。君らのような吸血鬼なのに吸血鬼にふさわしくないような行動ををする者が大嫌いでね。髪もそうだが貴様が血に怯えるのだけはどうしても矯正したくてね。この吸血鬼の恥さらしが!」
ロレメアが怒鳴り散らす中、フィーゼルは先程のロレメアのある発言がどうにも引っかかっていた。
君ら?私以外にも?
しかしその疑問はすぐに解消される。
「ああ、そういえばもう1人…。君の妹のフランドールスカーレットも幽閉している。彼女が配下を1人殺す度、彼女への待遇もそれ相応に酷くなっていくから気を付けたまえ。もちろん君も。はっはっはっはっ……。」
そうしてロレメアは愉快そうに笑いながら去っていた。

ここから、彼女たち2人への地獄のような日々がスタートする。虐待的な暴力は当たり前で、時には1週間飯抜きや、あの時の事への事情聴取と称した拷問尋問など、他にも
長時間の、直射日光。流水へ放り込まれる銀製の刀やナイフで刺されるなど吸血鬼の弱点も突いた行為が日常的に行われた。が幸いにして性的な虐待は行われなかった。向こうも分かっていたのだろう。そんな事をしようとするものなら逆に自分が殺られるという事が。
そして、幽閉から70年ほど経った頃、1度だけ幽閉されてからフランドールが大暴れしたことが、あった。それは、フィーゼルの翼が折られ剥ぎ取られたから。もちろん、その行為にも、彼らなりの理由はあった。”吸血鬼の再生能力の限界を試すため”という理由だ。このためだけに、翼を折られたその理不尽さに怒り狂ったのだった。

そして…。

彼女らへの虐待や幽閉はおよそ８０年間にも及ぶ凄まじいものとなった。その間もレミリアは待ち続けた。最悪の結末を迎えてしまうことを恐れながらも。そんな中、幽閉を終わらせるきっかけとなる事件が起きる。

その日ロレメアはある1人の配下にどうしてもと頼み込まれ渋々と了承したとある案件の監視のために配下と地下の牢獄へと向かうその頼み事とは”どちらでもいいからヤらせて欲しい”というもの。しかしフィーゼルを狙えば確実にフランに爆破されるので、フランを選んだのだが、これが間違いだった。それに気が付かぬまま2人は牢獄内へと忍び寄る。ロレメアは気が付いていなかった。幽閉から5年ほどで2人がお互いを守るため毎日寝る時どちらか片方は、確実に息を潜めつつ起きていたことに…。そしてフィーゼルは１０年ほど前に能力が発現していたことに。フランを選んだのには能力を封じることも目的ではあるが、万が一にもフィーゼルが暴れたとしても自分が抑えれば大丈夫だろう。”何せ能力が無いのだから”というその驕(おご)りが自分を殺す。

そしてロレメアは殺された。フランドールを守らんとするフィーゼルの手によって一瞬で四肢を細切れにされたのだった。

□　□　□　□　□　□

「はあ、はあ。動かないで…下さい。少しでも動けばあなたも殺します。」

フィーゼルは目の前で――――あまりにも突然起こった事に理解できず――――硬直(フリーズ)している相手にそう告げる。相手もフィーゼルの一言で自分の立場に気が付き、少しでも形勢を巻き返そうと、こちらを睨み付けてくるが…。次の瞬間フランドールに殺された。

「お姉様大丈夫？顔が真っ青だよ？」

「だ、大丈夫ですよフラン。血を見なければいいだけですよ…。」

うぅ…。あたり一帯血だらけとかすごく最悪です…。早く抜け出したいです。

「じゃあフランひとまずお姉様の所に行きましょう。」

「うん。そうだね。本当に久しぶりだなあ。私も早く会いたいなぁ

～。」
フラン、ものすごく余裕そうですね…。すごく羨ましいです…。
「ですよね。早く会いに行きましょう？」
「でもお姉様、私忘れ物したから、取りに行ってくるから先に行ってて？」
「分かりました。フランも早く来てくださいね？」
そう言って２人は別れフィーゼルはレミリアのもとへ向かう。
「お姉様失礼してもいいですか？」
反応がありませんね…。まあ、もう日が昇ってますし、仕方ありませんね。フランが来るまでここで待ちますか…。
そんなことを思いつつ、フィーゼルは扉に背を預けそこに座り込む。が、睡魔に負けたのか幾らも経たずに眠ってしまっていた。

――――翌日
「あれ？ドアが開かない…。よい…しょっと。」
ゴッ！
「痛っ！んぅ？」
あれ？フランが寝てる…？いつの間に来たんでしょう？
「フィー？そこにいるの!?え!?どういうこと!?」
「あ、お姉様すみません。今どきますね。フラン…フラン起きてください。」
「んん～。あ、おねーさまおはよー。」
「おはようございます。ちょっとそっちにずれてもらってもいいですか？」
「いいよ～。」
ガチャ！
ドアが開くとそこにいたのは目にたくさんの涙をためたレミリアだった。
「もう…戻ってくるのが遅いわよ、私がこの８０年間どんな気持ちで過ごしてたと思ってるの…。」
「すみません、お姉様…。でも私はこの通りしっかりと戻ってきまし

た！」
「ええ、そうね。あなたの言葉を信じてよかったわ…。」
「まだ覚えてくれていたんですね…。ありがとうございます。」
「ところで、どうやってあそこから抜け出してきたの？」
「ああ、それはですね…。う～ん、なんて説明したらいいか…。まあ少し省きますが、早朝ロレメアが牢獄に来て、何やかんやあって殺したのでって感じですかね…。」
少し省きすぎましたかね…？
そんなことをフィーゼルが思っていると。その通りですと言わんばかりの顔をしたレミリアが、
「省きすぎて全く分からないじゃない…。」
と、思わず苦笑いでツッコミを入れる。８０年たっても昔と何も変わらない姉妹の姿がもうそこにはあったのだった。
「ところで、」とレミリアが今、最も懸念すべき事態に話を変える。
「ロレメアがいなくなったのはいいけど他の吸血鬼はどうするの？」と。
しかし、その質問にすぐさま反応したのは意外にもフランドールであった。
「ああ、それなら大丈夫だよレミリアお姉様。」
「どうしてかしら？まだ騒ぎにはなっていなくても、一部の吸血鬼たちはもう気が付いているかもしれないじゃない。」
「だって、昨日の内に、私が全員殺しちゃったもん。」
「は？」
「だからぁ、私がお姉様と別れた後全員殺しちゃったの。」
「…。」
「…。」
これには、２人とも絶句せざるを得なかった。何せ、この館には少なくとも７０名ほどの吸血鬼がいたのにもかかわらず、自分らが眠っている間にそれを全滅させるなど、ありえないことだからだ。
だが自分たちがその行動に救われたのもまた事実であるとレミリアは考える。

後日、館の掃除が終わった後に姉妹３人で話し合ったが、やはり自分たちが救われたことに違いはないので、フランは許された。”もう２度と緊急時以外その能力を使わない”という条件付きでだが…。その後すぐに、姉妹たちの話題はフィーゼルの能力の話へと、移り変わっていく――――

「結局、お姉様の能力ってどんなことができるの？」

「それは私も少し気になってたわ。」

「うーんと、私もいろいろ試してみたんですけど、何というか、どんなものでも分けれる感じ？ですかね…。」

「ちょっと、抽象的すぎるんじゃないかしら？」

「ですよね…。」

う～ん。どうしたら分かって貰えるんでしょう？

「じゃあさ、お姉様。私たちの前でやって見せてよ。」

「なるほど！分かりました。」

そういってフィーゼルはしばらくどこかへ行くと、３０センチほどの長さの板を以って戻ってきた。

「範囲は私が触れている物限定だったり触れていなくてもできたりと対象によって変わるみたいなんですけど、物体であれば触れた瞬間にこうなりますね。」

そう説明しつつフィーゼルは板に触れてみるその瞬間。

「！」

「お姉様、すごーい。」

板は真っ二つに割れたのだった。

「普通にすごく強い能力ね…。分かってると思うけど、暴発しないように気をつけなさいよ？」

「もちろんです！」

「じゃ、今日からまた、昔みたいにのんびりとした日々が始まるわね。」

「そうですね。」

「ようやく元に戻ったね。」

そういう彼女たちの顔にはまぶしいほどの笑顔が広がっていた。

「解散！」

そのレミリアの一言で、彼女たちはまたいつも通りの日常へと戻っていく。レミリアは優雅に外を眺め、フィーゼルは久しぶりの魔法の研究へと戻り、フランドールは屋敷内をうろうろする。

――そして、この日から約３５０年後。

ある１人の妖怪が姉妹のもとを訪れる。旅をしていて、強者と戦うことを生きがいとしているらしい。

ふむ…。強者と戦ってきただけあってなかなかの妖力を発してますね。

「お姉様。彼女と戦う代わりに、負けたらここの門番として働くことを条件にしたらいいんじゃないですか？最近、私たちを狩ろうとしてくるハンターが結構多いですし…。」

「そうね。」

なんて経緯から、彼女と戦った。最初はどのようにしているのか、目を閉じた状態で、レミリアの攻撃を防いでいたが疲弊してきたのか３０分ほどで防げなくなり、結局レミリアの勝利となった。その分、レミリアもだいぶ疲弊していたが…。

後日聞いた話によると”気”を使う程度の能力を持っているため、目を閉じていてもレミリアの”気”が見えたらしく、それのおかげで防げていたのだそうだ。

というわけで、『紅美鈴』が仲間に加わった。

――そこから、さらに約２０年後。

魔法使いを自称する魔女が、紅魔館を訪れる。が、敵対をせず、彼女はむしろ友好的な態度で、魔法を教えて欲しいと、言ってきた。最初は皆、半信半疑だったが、次第にレミリアと凄く仲良くなっていったので、フィーゼルやフランドールも彼女の事を信頼し、仲良くなっていった。

というわけで、『パチュリー・ノーレッジ』が仲間に加わった。

――――そして、その日からさらにさらに約４０年後。
吸血鬼ハンターからの刺客として、極めて銀色に近い白髪の少女がやってくる。
当初、姉妹は皆、大した脅威ではないと考えていたが美鈴が信じられない速度で突破されたことを、考慮しフィーゼルとレミリアで対処に当たることにした。彼女の持つ、”時間を操る程度の能力”に苦戦はしたものの、フィーゼルの持つ分ける能力で彼女を周囲の空間ごと分離して捕獲。説得して紅魔館のメイドとして雇うことになったのだった。
彼女には名前が無かったため、レミリアが十六夜咲夜と名付けた。
というわけで、『十六夜咲夜』が仲間に加わった。

第肆話　「忘れ去られた郷への移住」

その話を聞かされたのはつい最近の事だった。
ロレメアとは別の家系の吸血鬼(同族)達から切羽詰まった様子で告げられた、”このままでは、自分たち吸血鬼や妖怪は消えてしまう”という事実に、紅魔館メンバーは頭を抱えていた。
どうしたものかなぁ…。と。
何せ、自分たちだけで動くのだって、人間たちから見つかりかねないのに、そんな一族が同時に行動するなんて、見つけて下さいと言っているようなものだからだ。しかし、動かなければ逆に自分たちが自然消滅してしまう。それ故に、
どうしたものかなぁ…。と。
□　□　□　□　□　□
フィー「う～ん、でもやっぱり私は移動した方が良いと思います！」
レミ「どうして？」
フィー「だって普通に考えて嫌じゃないですか。消えてしまうなんて、ここにいる皆さんともう2度と会えないのと同じですし…。」
フラン「だよね～！私もお姉様と別れるの嫌だし、移住するべきだと思うな～。」
美鈴「私はお嬢様方に従います。」
咲夜「私もです。あ、お嬢様、紅茶をお飲みになられますか？」
レミ「お願いするわ。」
フィー「今じゃ、咲夜もすっかり紅魔館の従者ですね。私たちを殺しに来た時とは、見違えるほどに変わりましたよね～。」
咲夜「すみません、フィーゼルお嬢様。あの時の私は、誰からも相手にされず、ただひたすら命令に従っていただけですので、その話はできれば…。」
と咲夜があまりにも懇願するような顔をしてくるので、フィーゼルも悪いと思いその話は流れた。
フィー「すみません咲夜。つい、悪ふざけが過ぎましゅた。」
レミ「ん？過ぎましゅた？」

フィーゼルが噛んだ瞬間、みんなの視線が、一気にフィーゼルへと集中する。そんな当の本人のフィーゼルは――――

フィー「ッ～～!!」

両手で顔を隠し恥ずかしそうに下を向いている。よく見たら耳まで真っ赤だ。そんなフィーゼルを見かねてか、フランドールからフォローが入る。

フラン「まあまあ、そんな気にしなくても大丈夫だよお姉様。そのくらい誰にだってあるって。」

そのとき、フィーゼルとフランドール以外の全員が、”フラン、ナイス!”と思ったのだった。そして、話は戻る。

パチェ「正直な所、私1人の力だけじゃどうにもならないけど、フィーの力もあれば移住は成功すると思うわ。」

レミ「う～ん、そうねぇ。パチェがそういうのなら大丈夫なんでしょうけど、フィーは大丈夫なの?あなた、あの時から大体の食事はフランにあげてたから体調を壊しやすいかもってフランが言ってたけど…。」

フィー「大丈夫ですよ、お姉様。私はこの通り元気ですから。」

レミ「そう?ならいいんだけど…。それにパチェだって喘息は?」

パチェ「私も大丈夫よ。最近はそんなにひどくないから。」

レミ「う～ん。大丈夫だといいけど…。しかも、移住するにしたって、向こうに移住した途端に殺されたんじゃ、たまったもんじゃないわよ?」

フィー「では、他の吸血鬼たちには私たちがぎりぎり消える一か月ほど前に行くと伝えて、彼らが行ったあとに、私たちが行けばいいんじゃないですか?」

パチェ「私もそうすべきだと思うわ。」

レミ「う～ん。本当は同胞は裏切りたくないんだけど…。仕方ないわね、それで行きましょう。」

フラン「決定だね!じゃ、さっそく準備に取り掛かろー!」

「「「おー!」」」

フランドールの掛け声でその場はお開きとなり、移住への準備は

着々とす進められていく。

そして移住当日。

パチュリーとフィーゼルによる詠唱が行われていく。そして…。

パチェ＆フィー「「転移！」」

その言葉が唱えられた瞬間、床に描かれた巨大な魔方陣が発光しだし、辺りは白い光に包まれた。そして光が消えると、なぜかフィーゼルは紅魔館の屋根にいた。

あちゃ～。魔法陣に指定座標描くのすっかり忘れてました。これは後で相当怒られますね…。

と、フィーゼルは項垂(うなだ)れる。しかし、そんなことをしていても周囲の警戒は怠らない。

近くに、妖怪の反応はありませんね…。同族の反応もありませんが…。

ふと、不意に後ろから気配を感じ、すぐさま振り返る。が、そこには誰もいない。

なんだ…。気のせいでしたか…。

とフィーゼルが油断したその刹那、先ほどまで誰もいなかった空間から鋭利な刃物がフィーゼルの顔面めがけて襲い掛かるも、間一髪それを避ける。

フィー「うわっ！とと、危ないじゃないですか。」

???「今のを避けれるなんて…。さすがに少しばかり意外ね。」

フィー「だれです？あなたは？」

???「私の名前は八雲紫。この幻想郷の…管理人よ。」

その言葉を聞いた瞬間フィーゼルの顔から感情が抜け落ちる。それは、本気の時のフィーゼルの姿。それは、生物の本能的なものに近い。つまりは、”殺られる前に殺れ”と体が告げているが故の本気だ。その構えと並行して、フィーゼルは体の変化に疑問を抱いていた。

さっきから、頭がすごく痛いですね。敵に何かされたんでしょうか？それに嫌な予感もしますし早めに片付けたいところです。
フィー「その…管理人さんが私に何か御用ですか？」
紫「ええ、先日あなた達と同じ吸血鬼がたくさん攻め込んできてね、すぐさま対処したからいいものの、周辺の村々には結構甚大な被害も出ちゃってるから、その責任も含めて悪い吸血鬼は殺しちゃわないとと思って。」
フィー「そんなことさせると思ってるんですか？」
紫「ええ、もちろん。だってもう私の式神が殺しに行ったから。」
フィー「！」
お姉様たちが危ない！。フィーゼルがそう感じ、すぐさま館内に戻ろうとするが、それは、紫の手によって阻まれる。
さっきより、頭痛が酷くなってる。お姉様たちを早く助けに行かないと…！そのためには…まず……。
フィー「あなたから殺さないと！」
紫「！」
□　□　□　□　□　□
フィー「あなたから殺さないと！」
そう、彼女が告げた瞬間銀髪の少女は目の前から掻き消える。
速い！でも私には、”境界を操る程度の能力”があるから――
紫「なっ…。カハッ！」
息が出来ない。それに『能力も使えない！』
紫「どうし…て――
フィー「どうして、能力が使えないのかって？」
紫「！」
フィー「そんなの簡単な事ですよ。私の能力であなたと、あなたの所有する能力とを”分離”したんですよ。式神を連れて戻し私たちをこの世界に受け入れてもらえるなら、今ここであなたを殺めるのはやめましょう。どうですか？」
くっ！ここは、いう通りに…するしかないようね…。

紫「わか…た…わ…！だか…離してちょ…うだい！」
そういうと、フィーゼルは意外にもあっさりと紫を離し開放したのだった。ただし、保険付きで…。
フィー「いいですか？このナイフはあなたに刺さってはいますが、傷を与えるものではありません。ですが、もしあなたが、逆らうような真似をしたときは…あなたは死にますよ？」
紫「分かってるわ。」
そういうと紫は何処とも知らない〝目〟だらけの空間に消えていったのだった。
□　□　□　□　□　□
――翌日。
レミ「いや～、まさかフィーのおかげだったとは思わなかったわね。正直フランの能力使うところだったわよ。」
そ、そんなに切羽詰まった状況だったんでしょうか!?とにかくみんな無事でよかったですけど…。
レミ「それと、私達より前に来た吸血鬼たちの事件の事は吸血鬼異変って呼ばれてるらしいわ。」
フィー「そんな風に呼ばれてるんですね～。」
良かった。魔法陣の事は何も言われなさそ――
パチェ「ところで、フィー？言いたいことがあるんだけど言ってもいいかしら？」
やっぱり、覚えてますよね…。
フィー「ど、ドウゾオシャベリクダサイ。」
パチェ「じゃあ、言わせてもらうけど！あれほど忘れないうちに、座標を書き込んでおきなさいって言ったじゃない！危うく、本当に離れ離れになるところだったわよ!?」
フィー「す、すみません！もうしないように気を付けるので、許してはもらえませんか？」
パチェ「次はないわよ？全く、本当に危ないったらありゃしないんだから。…ブツブツ……ブツブツ……。」
フラン「誰にだって忘れることはあるし、次頑張ろ―！」

フィー「そうですね。フラン、ありがとうございます。」
フラン「むふふふ…。ぜんぜんいいって～。」
レミ「でも、同族たちが来たことが異変って呼ばれてるんだったら、私たちが来たことだって、何かしらこう…何というか名前で呼ばれたくない？」
フラン「それはあるかも！みんなで名前考えよー。」
フィー「え？けど、そういう名前って人間たちが勝手につけるものなんじゃないんですか？」
パチェ「私もてっきりそういうものだと思ってたのだけれど…。どうなのレミィ？」
レミ「も、ももちろん知ってたわよ？ただ、あなた達を試しただけよ。ねーフラン？」
フラン「そうそう、私とレミリアお姉様は知ってたから！あえて出しただけだから！」
お姉様もフランも知らなかったんですね…。
フィー「では、私たちがここに住むための許可は取ってあるのでここでまた過ごせばいいですね。」
レミ「そうね。」
パチェ「じゃあ、私は図書館に戻るわ。」
美鈴「では、私も仕事に戻りますね。」
咲夜「お嬢様、何か必要なものなどはありますか？」
フラン「お姉様。何かして遊んで！」
フィー「その前に寄りたいところがあるので、その後でもいいですか？」
フラン「いいよー。」
そして、紅魔館の住人たちは、各々の時間へと移っていく。そこでレミリアが先程の咲夜の質問に答えるように、指示を下す。
レミ「そうねえ、じゃあ食材を買うついでに情報収集をお願い。」
咲夜「かしこまりました。」
後にこの情報収集から得た情報により新たな異変が始まる――――

果たしてそれは、必然であったのか、はたまた偶然出会ったのか、それは誰にも…わからない。

第伍話　「紅き霧は空を染める」

咲夜「お嬢様、ただいま戻りました。」
レミ「ああ、咲夜。お帰りなさい。」
レミリアは、情報収集も兼ねた買い物から帰った咲夜へ真剣な表情であることを訪ねる。
レミ「それで……
咲夜「…。」
レミリアの聞かんとしていることを察し、咲夜が口を開きかけたその時、レミリアが先に口を開いた。

レミ「それで…今夜の晩御飯は何かしら?」
レミリアのその発言を聞き、咲夜は…呆れていた。
咲夜「はぁ～。最初に聞くのがそれですか?もっと…こうあるでしょう!?人里はどんな状況であったか、とか、何かめぼしい情報はあったのか、とか――――
気が付くと何やかんやで咲夜は数十分ほど説教をしていたが…
フィー「まあまあ、落ち着いてください。咲夜。」と
咲夜がレミリアを叱っているところを
たまたま居合わせたフィーゼルが咲夜をなだめたことによって咲夜は落ち着きを取り戻した。既にレミリアは半泣きだ。
咲夜「すみません、フィーゼルお嬢様…少し取り乱しました。」
フィー「いえいえ。気にすることはないです。今のは完全にお姉様が悪いですし。」
レミ「そ、そんな…。フィーまで…。酷いわ。」
フィー「お姉様も機嫌を直してください。咲夜も悪気があったわけではないですし。」
そうフィーゼルが優しく伝えると、レミリアの機嫌もだんだんと元に戻ってきた。
レミ「それじゃ、気を取り直して、人里で得た情報を教えて頂戴。」
咲夜「はい。まず、異変についてですが異変は妖怪たちが気まぐれ

で起こすものらしいので、いつ起こしてもいいのではないかと思います。あとは…ここの世界は私たちが、元いた世界とは隔離されていて、幻想郷なんて呼ばれているらしいですね。」
レミ「ふ～ん。でも、異変起こすのはいいけどそれって誰かが止めに来るわけ？」
咲夜「はい。里にいた者の話では、なんでも巫女が止めに来るとか。」
レミ「へぇ～。止めに来る相手がいるなんて殺りがいがあって良いわね。」

と、レミリアは誰に言うでもなくそんな事を嗜虐的な笑みと共に言い放つが、そんなレミリアの発言は次の咲夜の発言のによって無意味なものと化した。
咲夜「お嬢様。残念ながら、今の幻想郷において殺しは絶対にしてはならないものとなっているようです。」
レミ「も～！それを先に行ってほしかったわ！」
咲夜「申し訳ありません。」
フィー「それにしても、すごいですね。これだけの情報を得て来ただけでも十分ですよ。」
レミ「む…。まあ、そうね。今回は見逃してあげる。」
咲夜「ありがとうございます。それと、先ほどのフィーゼルお嬢様の発言に関しても1つご報告が。」
フィー「なんでしょう？」
咲夜「実は、里で話を聞いて回る中で、1人だけあちらから近寄ってきて自らこの世界や今の戦い方について情報を提供してきたものがいまして…。」
フィー「もしかして、その人って紫色の服着てました？」
咲夜「その通りです。」
咲夜は少し驚いたように、目を見開いてフィーゼルのほうを見た。
咲夜「もしかして、お知り合いなんですか？」
フィー「いえ、私たちが幻想郷ここに来た時に、1番最初に私が倒した相

手も紫の服着てましたし…。しかも管理人らしいですしね。」
レミ「ここの!?よくそんな化け物相手に勝てたわね…。」
これには、レミリアも驚きを隠せないようだ。

咲夜「なるほど、管理人ならこの世界について詳しく知っているのも、それを説明できるのにも納得がいきますね。」
レミ「それで、肝心の戦い方についてはなんていていたのかしら?」
咲夜「戦い方に関しては、スペルカードルールというものが存在するようです。」
そういいつつ、咲夜はあらかじめ用意していたかのようにスペルカードルールについて書かれている紙を取り出し、自分の主たちに見せた。
紙には大まかにではあるが、ルールについて書かれている。
・スペルカードルールはあくまでも、ごっこ遊びの範疇(はんちゅう)にあり、殺し合いではない。
・決闘（弾幕）の美しさに意味を持たせる。攻撃より人に見せることが重要。
・意味の無い攻撃はしてはいけない。
・体力が尽きるか、すべての技が相手に攻略されると負けになる。

・このルールで戦い、負けた場合は負けを認める。余力があっても戦うことはできない。
フィー「ふむ…つまりは美しい攻撃で相手を負かすゲームという事ですか。」
レミ「面白そうね。」
咲夜「そしてこの勝負には弾幕をただ出すだけではなく、必殺技としてスペルカードを用いるみたいですね。」
フィー「さっきの2行目の技というのはこのことだったんですね。」
レミ「なるほど。だから、スペルカードルールか…。なかなかバランスの取れた遊びね。しばらくは退屈しなさそうでいいわ。」
フィー「でも、遊びもほどほどにしないと怪我しますから気を付け

てくださいよ？」
レミ「分かってるわよ。咲夜、戻るわよ、早速スペルカードを作るわよ。」
咲夜「はい。お嬢様。」
レミ「フィーも何かしら作っておきなさいよ～？」
フィー「は～い。」
レミ「咲夜フランたちにもこのことを伝えておいて。」
などと咲夜に指示しつつ、幼き紅魔館の主は自室へと戻っていった。そしてフィーゼルは問う。
フィー「何か御用ですか？幻想郷の管理人さん？」
紫「別に、特に大した要件はないわ。それと、私はもうあなた達が移住することを認めたんだし、そろそろそうやって威嚇するのやめてもらえると助かるんだけど…。」
どうやら管理人は少し呆れてもいるようだった。そのことを、それなりに察してしまったフィーゼルは依然警戒はしつつも、彼女の話を――彼女の態度から見て――少しだけ聞いてみようと思い彼女に問いかける。
フィー「では、何のために幻想郷の管理人さんがこんなところへ？」
紫「あなたに話があるからよ、フィーゼル・スカーレット。後、その幻想郷の管理人っていうのやめてくれないかしら？ちょっと、恥ずかしいんだけど…。」
彼女のそんな発言にフィーゼルは舌を巻く。管理人というからには厳格な態度で威圧してくる超人のように感じていたのに、今自分の目の前にいるのはどこにでもいる普通の人と同じことをする超人だったからだ。
余りにも予想外で、ついおかしくなってフィーゼルは笑う。
フィー「くすっ。なんですかそれ、あははっ。じゃあ何と呼べばいいんですか？」
そして思った。この人は計算高いが悪い人ではないな…と。
紫「もうっ、前言わなかったかしら？紫よ。八雲紫。」
フィー「紫ですね。分かりました。私の事はフィーでもフィーゼル

でも好きなように呼んでください。」
紫「分かったわ。フィー。それで、話なんだけど…。今あなた達は異変を起こそうと考えているでしょう？」
フィー「ええ。」
先程の和解からさほど時間は経っていないものの、すぐに話は異変に関する物へと切り替わる。しかしこの会話がフィーゼルが本来歩むはずの悲しきレールから彼女を脱線させ、彼女が望む世界（理想）へと導くものの第一歩であることを彼女が知る術（すべ）はなかった。
紫「その異変。あなたには参加してもらいたくないの。」
フィー「え？」
□　□　□　□　□　□
フラン「ねえねえ、パチュリー。何してんのー？」
パチェ「フラン。少し黙っててちょうだい。今は集中させて…。」
フランドールが下を見ると、そこには向こう側から移住してくるときにも見た魔法陣と同様の輝きを放つ、別の魔法陣だった。くうっ、とパチュリーから苦しそうなうめき声が聞こえる。大丈夫なのかと、フランが聞こうとすると、ボン！と魔法陣の中心から大量の煙が発生し…果たしてその中にいたのは、黒いスカートに赤い髪背中に翼を生やした…。
フラン「吸血鬼？」
パチェ「いや、正確には悪魔ね…。私レベルの力じゃ強い悪魔の召喚は無理だし、さしずめ小悪魔といったところかしら。」
小悪魔「えと…パチュリー様はどちらでしょうか？」
フランドールとパチュリーがそんなやり取りをしている最中、召喚された悪魔は怯えながらもそう口にする。
パチェ「私よ。」
その事実を知るや否や力小さき悪魔はパチュリーの後ろに隠れてしまう。それを不思議に思ったフランドールは首を傾（かし）げた。
フラン「？どうしたの？」
小悪魔「えぇと…あの…。」
フランドールの質問に辛（かろ）うじて声を漏らすが、その体はわずかに揺

れている。
パチェ「フラン、止めなさい。怖がってるわ。」
背中越しに伝わってくる恐怖心に見かねたパチェリーがフランに諭す。これには、さすがにフランも小悪魔が震えている原因に気が付き。すぐに謝った。
フラン「怖がらせちゃったみたい？ごめんね。」
小悪魔「あ…はい。大…丈夫です。これから…よろしくお願いします。」
フラン「よろしくね。」
小悪魔のほうも、フランの謝罪を受け入れる。そんな中、紅魔の魔女は呆れたように「この子の人見知りを直すのは大変そうね…。」と1人でごちたのだった。
そこへ咲夜がやってくる。こちらも見知らぬ人外の存在に警戒をするが、パチュリーの顔を見てそれが自分たちにとって敵対していないものであることを察したのか、挨拶を行った。
咲夜「この館のメイドを務めている十六夜咲夜です。」
小悪魔「…。」
一瞬の間のあと、一泊置いて小悪魔の自己紹介がされる。それが終わった後、咲夜は新しい家族も含め、先ほどと全く同じ説明を伝えたのだった。
□　□　□　□　□　□
その頃。
レミ「う～ん、暇ね。咲夜いないと指示する事も無いし、スペルも作り終わったし。」
紅魔の主は暇を持て余していた。暇なのは昔と同じだが、ここ最近は移住後の後始末や管理者の襲撃などもあって忙しい反面、少し楽しくもあった。なにより、今は異変を発生させる直前である。それを、仲間がスペルを作り終わるまで待っているなど、今のレミリアには耐えがたい苦痛も同然だろう。別に、レミリアが幼いと言っているわけではないが、静かに待ち続けるその姿は――その幼い姿もあいまっ

て――――子供のようだった。
そんなレミリアの視界にチラッと紅魔館の門が映る。
レミ「たまには、視察に出向くのも趣があって良いわね。」
と呟きながらレミリアは美鈴のもとに向かっていった。
□　□　□　□　□　□
先程の驚きを含んだ最後の一言から、なんとも微妙な空気になっており、2人は黙ったままだった。キーーーンとそんな音がしたわけでもないのに、耳鳴りのように耳の奥でなっている音に鬱陶しさを感じてフィーゼルは微かに目を細め、紫へ聞いた。
フィー「なんでですか？」
紫「これはこっち側の事情ではあるんだけど、実は幻想郷の異変は必ず博麗の巫女が勝つことによって解決するようにしなくちゃならないの。まあ、これは一種の暗黙の了解のようなものね。で、もしその巫女が異変を解決出来ずに負けて帰ってきたなんて情報が広まれば――――
フィー「これまで退治してきた妖怪たちがもう一度異変を起こす可能性があるという事ですか？」
紫「物分かりがよくて助かるわ。今ので半分正解。」
フィー「半分？」
紫「そう、半分。異変を起こすのは、これまでの妖怪どもだけではなく、息を潜めている者たちも一斉に行動を可能性があるでしょ？だから、あなたには参加してもらいたくないのよ。」
紫の説明に一応の納得はしつつも、まだ肝心の理由が聞けてないことにフィーは眉はひそめた。
フィー「でも、それって理由にはなって無いと思うんですけど…。」
紫「う～ん。そうね、他に理由があるとすればたぶん、私ならあなた達姉妹の残り二人を同時に相手にしても勝てると思うんだけど、あなたには一度敗北してるし、巫女を殺さないっていう確証がないじゃない？」
大分無茶苦茶だが、紫なりに精一杯それらしい理由なのだろう、顔にもうこれ以上は止めてほしいと、かいてある。

フィー「でもそれは、私が手加減をすればいいじゃないですか！」
しかしフィーゼルも引かない。何と言ったってこれが姉妹の初の共同作戦だ、なのに自分だけお留守番とか悲しいにもほどがある。ここ数百年、口喧嘩どころか普通の喧嘩すらほとんどしていないフィーゼルには、感情を抑えることがあまり得意ではない。それは、次第に感情が言葉にも出てき始めていることからも如実に表されていた。
ここで紫が、しょうがないといった顔でとんでもないことを言い出した。
紫「あなた達は、吸血鬼だから、恐らく夕方ごろに異変を起こすだろうと踏んで、異変を起こさせようと思ってるんだけど…。あなたが入ると…その…夜が明けちゃうから、霊m…じゃなくて巫女の寝る時間が無くなっちゃうじゃない？そうすると…昼間の妖怪退治に向かう人がいなくなっちゃうのよ…。だから、お願いしてるの！」
フィー「……。」
この衝撃的な告白に、フィーゼルはもはや何も言い返せなかった。あまりにも注文が身勝手すぎて…。フィーゼルが呆れを通り越して、放心していると、何を勘違いしたのか紫が別の事に関する弁明をし始めた。
紫「その顔は、なんで夜が明けるのが分かるのといった顔かしら？そんなの簡単よ、長く生きてれば自分の実力も分かるし、それと比べた相手の実力でどのくらい相手の実力があるかが分かるから、倒すまでのおおよその時間が分かるのよ。」
正直フィーゼルからしてみれば、そんな説明どうでもいいが、今考えると、こちら側が負けなければいけないのに、負けて日の光にさらされるなど生死にかかわる事案だ。そのことを考えてら今回出るのはやめておこう。と自分的にも納得のいく落としどころを見つけられるので、渋々紫のお願いを了承した。今の説明をレミリアやフランにもするという条件付きで。紫はめんどくさいです。というオーラむき出しの顔でフィーゼルの方を向いてきたが、こちらとしては大分譲歩したので、絶対に行ってもらう！という気持ちで紫を睨んだら、そそくさと向かっていったのだった。

フィー「う～ん。お姉様たちにはどう説明しましょう…。」
突然やってきて、無茶苦茶なこと言って渋々去っていった、あの紫(むらさき)ババアのせいで、新たに悩みの種となった事案の事について、少しばかりその場で考えていると、コツッコツッと誰かが歩いてくる音がし始めた、まあこちらにやって来た方向的にも足音の規則的さからしても来たのは十中八九レミリアだという事にフィーゼルは気が付いていたが…。
レミ「あら？フィーじゃない。こんなところでどうしたの？」
フィー「いえ、なんでもないです。それとお姉様、今回の異変なんですけど、ちょっと諸事情でその出れないんです。」
レミ「えぇ!?そうなの～？残念ね…ていうか、諸事情って何よ？」
まあ、当然の質問ではあるが、お姉様が、紫(ゆかり)に文句を言いに行かないようなんとしてでも諸事情で納得させるしかないと考えたフィーゼルは…。
フィー「その…どうしても言えないんですけど…諸事情じゃ駄目ですか…？」
上目遣いをした。結果は…効果は抜群だ！
レミ「ま、まあ、諸事情ならしょうがないわね。」
と言いながらそそくさとレミリアはどこかへ行ってしまった。
ちなみに、この後寝てるところを見つかった美鈴が、レミリアに長々と説教されたのは、また別の話。

――そしてあれから数日後の夕方。
レミ「さあ、異変の始まりよ！」
そう仰々しくレミリアが言い放ったあと、その広げられた手の中からモクモクと紅い霧が空へと流れていき、あっという間に、そこら一体の空へと立ち籠め始めた。
その時を以って紅霧異変が始まった。

第陸話　「巫女は異変を見逃さない」

レミリアが霧を出し始めてから３０分程経った頃、紅魔館に控える者たちは、皆一様に緊迫した面持ちをしていた。
その中でもごく一部の、妖精（メイド）や咲夜やパチュリーといった幹部クラスの手には、何かが描かれたカードが握られている。そして、当主たるレミリアからは、「あと１０分程で幻想郷の巫女が来るため、全力で潰すように」との指示が下っている。その様子を紫に見せられているフィーゼルもまた真剣な面持ちで観戦に臨んでいた。

フィーゼルは今、紫の家に来ている。そして異変の様子を八雲家にあるテレビから見ているのだ。一時間程ずーっと。
紫「そんなに、ずーっと見続けて疲れない？少し休んだら？」
流石に紫も集中しすぎと、思ったのか、休憩を挟まないかと提案をしたが、フィーゼルは首を振って、それを拒否した。
実はこのやり取り２回目だ。なんでも、他の人のスペルカードを参考にするためなのだとか。テレビには、ちょうど巫女が一戦終えたところが映っており、紫がボソッと「ルーミアもいつもいつも暇ね。」と苦笑するのが聞こえた。

ルーミアが負けてからしばらくして…。ついに美鈴との戦いが始まった。フィーゼルはよく見ると、うとうとし始めている。どうやらフィーゼルの方もコタツとの戦いが始まっているようだが…。
コテン
そんな様子を見て「コタツの力にはやっぱり勝てないわよね。」と紫は一人呟いたのだった。
□　□　□　□　□　□
私の名前は博麗霊夢。博麗神社の巫女を務めていて、その他にも幻想郷の結界管理や妖怪退治なんかもやってる。幼少の頃の事はあまり覚えてない。気が付けば、もう何年も博麗の巫女として毎日を過ごしていた。そして私は今、目の前の赤毛の妖怪に対して、とても困惑

していた。

霊夢「あんた、バカでしょ…。」

美鈴「くぅ～。いきなり、遠距離から仕掛けてくるなんて、卑怯ですよ～。」

それは、私と相手が会敵した時の事だった。

相手が私を見るなり嬉しそうに構えだして、「私は美鈴と申します。あなたは？」と聞いてくるもんだから、私は「霊夢よ…。」とだけ返してみたのだ。そしたら急に、手をこっちに向けて、クイッ　クイッてやってきたので、思いっきって弾幕を飛ばしてみたら、避けもせず、ぶち当たって「卑怯ですよ。」とか言われる始末。そういうのはやめてほしいものだ。まったく。

霊夢「何がよ？」

しかし何が卑怯なのかは聞いておかないと気が済まないので聞いてみたところ…。

美鈴「いや、相手と対峙するときはまず、近接で戦うべきなのではと思いまして…。」

正直かなり呆れた。なんて自分勝手な…。

霊夢「それじゃ、スペルカードの意味がないじゃない。」

美鈴「…。」

どうやら、何も言い返せなかったようなので、構わず先に進んだ。

霊夢「もしかして、ここの敵って、みんなあんな感じなのかしら。」

もし本当にそうなのであれば、楽に異変解決できるしラッキーだなと、期待もしていないことを少し考えてみる。しかし、その考えはやはりというべきか、次の会敵を以って否定されたのだった。

初めにおかしいと思ったのは、この館の異常なまでの広さだ。外見と違いすぎている。館に入った瞬間から付きまとっていた違和感がここにきて、真実味を帯びてくる。それに、霊夢は博麗の巫女であるがために、今回の異変が霊夢にとっての初の異変解決では無い。しっかりと以前から、異変は解決しているし、解決の仕方も学んでいる。今回のような、屋敷が広く、それぞれの廊下が扉で区切られているま

るで迷路のような屋敷の場合は、自分が迷わないように、しっかりと扉をひとつひとつ開けながら、進めるようにするだろうし現に今もそのようにしながら、探索をしている。が、まだたったの一度も扉の開いた廊下を見ていない。明らかに何者かに付きまとわれている。正直ウザったいと霊夢はイライラしながら考える。少し先に、部屋とそこに入るための扉があることを認めると、博麗の巫女は行動に乗り出した…。

ガチャ

霊夢が入ったのは何の変哲もないとある一室。そして入りざまに突如振り向き扉を蹴り倒す。

霊夢「やっぱりか…。」

そこにいたのは、銀髪を持つメイドの姿をした人間。多少驚いたかのような雰囲気を漂わせてはいるが、その顔からは驚いたことなど微塵も読み取れない。戦いなれているのが仕草の一つ一つからひしひしと伝わってくる。あからさまに人間なのに人間味の欠片も無い冷めた目、これではまるで――

???「チッ。スカーレット家の館に何か御用ですか？お嬢様は現在取り込み中ですので、私が担当を務めさせていただきます。メイド長を務めている咲夜と申します。」

相手の少女は少しイラついているようだった。しかしそれはこちらも同じだ。存分に仕返しをさせてもらうとしよう。そんなことを頭で考える霊夢は、そんなことは微塵も考えていないのにメイドにこう言い放った。

霊夢「そう。私は霊夢。博麗霊夢よ。それと、あなたたちの都合は私には関係ないわ。さっさとそこを通って部屋潰しを再開するだけよ。」

そんな心無い返事を受けてか、それとも元からなのか相手も負けじと返す。

咲夜「通れるものならどうぞご自由に。」

この言葉が火ぶたとなって、弾幕ごっこは始められた――

□　□　□　□　□　□

魔理沙「お邪魔するぜー・・・。」
私の名前は霧雨魔理沙。人間の魔法使いで霊夢と一緒に妖怪退治を行っている者だ。この屋敷はどうにもお宝の匂いがする。私の勘がそう告げてるぜ。そんなわけで、今はそっと屋敷に侵入している所なんだが・・・。
魔理沙「この館内部が広すぎるだろ・・・。」
そう1人で魔理沙はごちる。「派手に門が破壊されている形跡から霊夢は正面から入ったみたいだが、私は横から入ってすぐに主犯を退治だぜ！」と息巻いていた魔理沙もさすがにすっかり意気消沈していた。もう30分は彷徨ってるんじゃないかと疑ってしまうほど気の長い作業だ。行き止まりで引き返して、分かれ道を選択して・・・。
そしてついに魔理沙の我慢が限界に達する時が来たようであった。
魔理沙「あ～！もう迷路はうんざりだぜ！」
そういって懐から取り出した八角形の木材で出来た何かを壁に向け、カードのようなものを掲げ高らかに魔理沙は宣言し・・・
魔理沙「恋符【マスタースパーク】!!」
突如、その八角形の筒から高エネルギーの魔法が発動し・・・ 壁をぶち抜いた。それはもう、円形に綺麗にあいた穴の先が見えないと感じるほどに・・・。
魔理沙「ふぃ～。スッキリスッキリ。ようやくこの地獄のような迷路から抜けられるぜ～。」
魔理沙はしてやったぜ！みたいな気分良さげな顔でぶち抜いた穴を悠々と歩いているが、フィーゼルが今寝ていたのは幸いと言えよう。フィーゼルや咲夜が見ていたらぶち切れる事間違いなしな案件である。
そんな、当たりを興味津々な様子で見まわして進み続ける魔理沙の前に立ちはだかる人影が1つ。
???「ねえねえ、なにしてるの？今、時間ある!?侵入者さん！」
その人影は、とても高いテンションで魔理沙（侵入者）に楽しげに話しかける。そのテンションの高さから、魔理沙は少しだけ呆気にとられたような顔をしていたが、その目は笑っていた。

魔理沙「お？なんだなんだ？この魔理沙さんと何かしようってのかい？」
???「うん！フランと一緒にあそぼ？ぼこぼこにしてあげる！」
その言葉を聞いて魔理沙の口角が吊り上がったように見えたのは、果たして幻覚だったのだろうか？それとも人の身で吸血鬼に挑もうというのだろうか・・・？
魔理沙「弾幕ごっこでいいか？」
フラン「もちろん！」
この言葉をきっかけとして、こちらでも弾幕ごっこは始まった――

―

□　□　□　□　□　□
霊夢「ぐ・・・。」
咲夜「その程度で終わりなの？博麗の巫女さん？」
霊夢は苦戦していた。ただの人間と思っていたがとんでもない異能を秘めた咲夜の鮮やかにも美しい銀の攻撃に防戦一方となってしまっているようだった。
”仕方ない”そう決意して霊夢は予備のお札を使い始める。
霊夢「ふっ！はっ！やあ！」
投げられたお札は咲夜の元へ戻るかのように放物線を描いてどこまでも追いかけていく。それを避けんと動く咲夜を阻止するのは、霊夢が放っている弾幕だ。色とりどりの霊力弾が様々な形を描いて咲夜に殺到する。
実際、霊夢は攻撃が弱い訳ではなく、しっかりと咲夜に攻撃も当てているのだがその異能によって致命打をかわされているだけなのだ。
大量に放たれた弾幕を時を止めて回避しつつ、霊夢の直前で止まるように計算された力で投げられた銀のナイフは異様な輝きを放つ。そして…。
咲夜「解除」
霊夢「なっ…。」
そのあまりにも膨大なナイフの量に呆然としているように見えた

博麗の巫女に何かできるはずもなく、数多のナイフは動き出し…直後その額に銀のナイフが突き刺さる。博麗の巫女を倒した直後あたりには静寂が舞い降りる

咲夜「ふう…。博麗の巫女なんて呼ばれていても、所詮はこの程度ね…。」

そう霊夢の事を嗤いながら階段を下りる咲夜の足は不意に動かなくなった。

咲夜「え？」

そして唐突に気付く。先ほど倒した霊夢の死体があたり何処を見回してもその服しか落ちていないことに…。

咲夜「まさか！」

霊夢「そう。そのまさかよ。」

咲夜「ッ！」

急いで迎撃しようとナイフを取り出そうとするがその手に触れたのはあるべき位置にナイフがないために発生した空振りの空気だった。咲夜は戦闘中何度も時間を止めてナイフの回収に動いていたのだが、すっかり霊夢を倒したものだと思いそれ故に油断していたこともあり、ナイフの回収を怠っていた。

霊夢「これで…私の勝ちみたいね。」

咲夜「まだよ！」

霊夢にそう諭されたが、咲夜は諦めきれず、手を振りかぶったが―

―

霊夢「はあああああああ!!!」

その前に霊夢の攻撃が炸裂した。腹部に発生する霊力を込めた渾身の一撃に咲夜は為す術なく倒れ込む。

ドサッ

霊夢「はあ、はあ」

先へ進んでいく霊夢の後ろ姿を見ている咲夜は悔しさに顔を滲ませながらもその意識は闇へ沈んでいった。

□　□　□　□　□　□

咲夜が霊夢に負けた頃には既にこちらの勝負も決着がつきそうに

なっていた。劣勢なのは…どうやら魔理沙の方だった。
魔理沙「くそっ！」
フランの放つおびただしい量の弾幕を上手いこと掻い潜り、接近を試みつつ攻撃を行う予定でいた魔理沙だが、避けるのに手一杯で攻撃を行う余裕はない様だ。
フラン「あはははは。すごい！すごいよお姉ちゃん！もっともっといくよ！」
魔理沙「まじかよ…！」
とても楽しげに笑いながらとんでもない爆弾発言をするフランに魔理沙は苦虫を噛み潰したような顔をした。この時点でのお互いのスペルカードの消費枚数はフランが2枚。魔理沙は3枚と魔理沙の方が追い詰められているのが分かる。
なんとか、フランに攻撃を与え、フランは3枚目のスペルカードを使いだした。これを耐えきってもう一枚使わせる事が出来れば魔理沙が優位に立つ。
そんなことを考えていた魔理沙に急に好機はやってくる。何とフランの羽が一瞬だけ天井に引っかかりバランスを崩したのだ。これを逃す魔理沙ではない。
魔理沙「おりゃあああああ!!」
自分の出せる最大火力でフランに集中攻撃をする魔理沙。それもおかげもありフランは慌てたように4枚目のスペルカードを使いだす。それを見て魔理沙も4枚目のスペルを宣言した。
魔理沙「恋符【マスタースパーク】!!」
フラン「なっ！」
ドカーン！
紅魔館での二度目の爆発だ。大量の煙が吹きあれる。そして煙が晴れた頃、床に倒れて目を回すフランの姿がそこにあった。
この勝負、どうやら魔理沙の勝ちのようだ。
魔理沙「ふう～。危なかった～。」
何とか勝てた一戦であった。しばらくした後に魔理沙よりも知識の深い魔女パチュリーとも戦ったが、フランに比べると楽勝で、そこ

まで苦労せずに魔理沙はパチュリーをボコしたのだった。

□　□　□　□　□　□

霊夢が廊下を歩いていると下の方から大きな爆発音が聞こえた。いつも自分と一緒に妖怪退治へ赴く少女の事を思い浮かべながら「また派手に魔法を撃ってるわね…。」と呆れたように霊夢は一人呟いていたところに曲がり角で思わぬ人物と遭遇した。

霊夢「え…!?魔理沙!?」

いくらなんでも予想外だった。なぜなら、どう考えても今しがた下で起こった爆発音の犯人を魔理沙とするのならここにいるのはおかしいからである。しかし当の本人はなぜ霊夢が不思議がっているのかも分かっていない様子だ…。

魔理沙「ん?どうしたんだ霊夢?この魔理沙さんを見てそんなにびっくりするなんて…。なんかあったか?」

霊夢「いや…今さっき下で起きた爆発魔理沙のかと思ってたんだけど、急に魔理沙が出てきてすこし驚いただけよ。何かが暴れてるのかしら?」

魔理沙でない場合の可能性を考慮し、新たな敵に向けて策を考える霊夢であったが…。

魔理沙「え?何言ってるんだ?さっきの爆発は私が起こしたものだぜ?」

霊夢「えええ!?」

それを聞いてますます混乱してしまう霊夢。こんな調子で主犯を倒せるのかと心配にもなってきてしまうチームワークの無さだな少し思ってしまう霊夢。

結局魔理沙によって理由は判明はしたが――どうやらマスパを天井に向かって撃ったせいで開いた穴から来たようだ――どうにも霊夢は納得のいかなさそうな顔をしていた。

そしてついに…。

レミ「ようやく来たのね。待ちくたびれちゃったわ…侵入者さん?」

霊夢と魔理沙を待っていたのは月夜の明かりに照らされて不気味

に見える不敵に笑った吸血鬼だった。
しかしそんな悪魔を相手にしても、霊夢たちの態度は変わらない。
霊夢「あなたが主犯みたいね。今回の異変、責任を取ってさっさと霧を消してもらうわ！」
魔理沙「そして！あの図書館から魔法の本を借りに来てやるぜ！」
それぞれに言いたいことを言って戦おうと魔理沙は構えるが…。
霊夢「ちょっと魔理沙！またあんたはそうやって借りる借りるって言って！私まだあんたに貸した包丁返してもらってないんだけど!?私が普段どんだけ辛い思いして食材刻んでると思ってんの!?お祓い棒もそろそろ限界よ…。」
魔理沙「ええ!?お祓い棒で切ってんのかよ!?どんだけだよ…。悪かった！この通りだ！だから許してくれよ霊夢。」
霊夢「それも何回も聞いたわよ！まったく！もう今回ばかりは許さないから！この場であんたも懲らしめてやるんだから！」
なぜか霊夢の文句から喧嘩に発展した。その光景を見て「何というチームワークの無さだ。」とむしろレミリアが頭を抱えることとなる。
しばらくは見守ったレミリアだが堪忍袋の緒が切れついに霊夢らに襲い掛かる。が！まさにその瞬間に、霊夢が魔理沙にはなった夢想封印がまさかの直撃。結果…。霊夢の勝利となってしまう。レミリアの犠牲によって二人はなぜか中を取り戻したがレミリアの想定していた計画は失敗に終わったのであった。

第陸点伍話　「紫と次女」

―フィーゼル。フィーゼル。起きなさい。
んん…。これは…おかあさま？なんだかなつかしいようなきがするひびき…。またあいたい。ぎゅっとだきしめてほしい。一緒に魔法の話をしたい。……甘えたい。
幸せだったころに母にしてもらったことを思い浮かべながら、どこか上の空のようにフィーゼルは寝ぼけた頭でそんなことを考える。もう忘れてしまっていてもおかしくない、遠い過去の事を…。
―フィーゼル。もう終わっちゃったわよ？早く起きなさい。
フィー「はい。おかぁさま…。」
そうとろんとした声で返しながら、まだ眠たそうに眼を開くフィーの寝ぼけ眼に写ったのは…。
紫「可愛い所あるじゃない…。」
顔をによによさせながらこちらを見つめる紫と
藍「紫様。そんなところで二ヤついてないで少しは家事の手伝いでもしてくださいよ。」
そんな紫にツッコミを入れる従者の姿だった。
フィー「え？え、え、え??」
あまりに突然の出来事に状況を理解しきれていないフィーに対し紫がさらに追い打ちをかける。
紫「もう。フィーったらなかなか起きないんだから。フィーゼル…。って優しく呼んだら呼んだで急にお母様って…。そんなに愛に飢えてるなら私があげましょうか？」
そんな紫の馬鹿にする態度にいつものフィーゼルなら顔を紅くして優しく反論するところだが、今回は少し違った。
フィー「…っ～～～～～!!」
フィーはいつも通りみるみる顔を真っ赤に染め上げて…
フィー「ぐす…。そんなに…バカにぃ…ぐす…しないでくださいよぉ！わたしだってぇ…ぐす…なにもいままでさみしくなかったわけじゃないんですよぉ!?ぐす…うううううぅ～～～～。」

どういうわけか泣き出してしまった。もうそれはガチ泣きの勢いで。
普段ではこんなことは絶対にありえないのだが、寝ぼけていたとはいえ久しぶりに母の事を思い出し、しかも寝起きで物事の判断が付きにくいことも手伝って、すこし紫の言葉が心に来たようだった。
紫「え!?嘘!?えええ!?」
これには妖怪の賢者もビックリ。ちょっとからかう程度で済ませるつもりが突然の号泣。これに対し今度は藍が紫を煽る。
藍「あ～あ。フィーゼルさん泣かしちゃいましたね…。あとでお姉さんと妹さんが切れて家にやって来ても私は庇えませんからね？」
紫「お願い！藍何とかして！」
藍「知りません！ご自分で何とかなさってくださいよ。」
紫「そんなぁ～。」
紫が自分のしたことを本気で後悔した出来事であった…。
ちなみに後でスカーレット家の姉妹が紫家に乗り込んできたのは言うまでもない。

第漆話　「酒は飲んでも飲まれるな」

――――異変化解決後。

紅魔館の中は咲夜などのメイドたちがあわただしく動き回っていた。

メイド「メイド長、このお酒は何処に運べばいいでしょうか!?」

咲夜「それは、門の前に運んでちょうだい！そこで美鈴が待っているはずだから！」

メイド「はい！分かりました！」

メイド2「メイド長これはどこですか!?」

咲夜「それも門の前よ！」

異変終了後はどうやら博麗神社で宴会が催されるのが恒例だそうで、異変首謀者が食料などを提供しろと紫に言われ紅魔組は大慌てで整理と運び出しを行っているのだ。

一方霊夢と魔理沙は紅魔館のレミリアの部屋で紅茶を飲みながら話をしている所だった。

レミ「というわけで、これからよろしくね霊夢、魔理沙。」

魔理沙「おう。よろしくなんだぜ。」

霊夢「…。こちらこそよろしく頼むわ。」

魔理沙「…？」

霊夢が少し間をあけて挨拶をしたことに魔理沙は疑問を持ったようだがそれを聞く前にレミリアが口を開いた。

レミ「それで…。地下に開いた穴どうするの？あれの修理結構ばかにならないんだけど。フィーが怒ってたわよ？」

霊夢「あー…。言っとくけど…私はやって無いからね？」

魔理沙「あ！霊夢お前ずるいぞ。お前も同罪だぜ!?」

霊夢「なによ。あんたが派手に穴開けたんでしょ!?私関係ないから！」

レミ「まーた始まった。二人とも喧嘩しかできないわけ？」

何故か始まる口喧嘩にレミリアは呆れてそう突っ込む。しかし二人にはもっと別に聞きたいことがあったようだ。

霊＆魔「ところで、フィーって誰（なんだぜ）？」
レミ「え？」

しーんと場が静まり返った。
再度レミリアは口を開く。
レミ「うーん。おかしいわね。異変には参加できないとは言ってたけど。一度も合わないなんて、どこかに行ってたのかしら？」
フィー「わわっ!?」
レミリアが誰に向けたわけでもない言葉を言い終えた直後、突如霊夢の後ろから変な言葉が聞こえた。
霊夢「ん？」
そこにいたのはフィーゼルと紫だった。
それを見た霊夢はひどく嫌そうな顔をする。
紫「そんな嫌そうな顔しないで霊夢。今回は別にあなたにどうこうってわけじゃないわ。」
魔理沙「じゃあ、何しに来たんだ？」
誰について話すのかは分かったが何を話すのかはわからなかった魔理沙が霊夢の代わりに紫に質問を投げかける。
紫「それはこの子の紹介よ。」
２人がそこへ視線を向けると気恥ずかしそうにわずかに頬を紅らめた少女がこちらを見つめて立っていた。
□　□　□　□　□
う～ん。どこかレミリアに似てるわね…。
目の前の少女を見つめながらそう霊夢は考える。しかしレミリアと違ってこの少女には吸血鬼に本来あるべき翼がないのだ。そこを考慮すると何とも言い難い考えになる。
やっぱりレミリアの姉妹なのかしら？
そう結論付けて霊夢は少女が口を開くのを待った。このときの霊夢の読みは当たっていた。翼がないのは伯父に取られてしまったから。その事実を霊夢が聞くのはもう少し後の事となる。
フィー「えーと。スカーレット家の次女に当たるフィーゼル・ス

カーレットです。よろしくお願いします。」
魔理沙「ああ。よろしく頼む。私は霧雨魔理沙だ。気軽に魔理沙と呼んでくれるとありがたいのぜ。」
霊夢「博麗霊夢よ。私の方も気軽に霊夢と呼んでくれればいいわ。」
２人の返しを聞いてフィーは何処か安心したような表情で頷く。
その他にも基本的な事についての紹介を終えたところで紫は何やら楽しそうにレミリアにこう告げた。
紫「レミリア。フィーを大切にしてあげなさい。それと、もっと愛情を注いであげて。」
フィー「なっ！」
レミ「？」
そう告げて紫はさっさと隙間の中に消えて行ってしまった。
残されたフィーゼルの方に視線が集まる。フィーゼルは顔をはじめより一層紅くしながらレミリアの後ろに隠れるのだった。
それを受けレミリアの方は頭に浮かぶ疑問符はさらに増える一方。
このときフィーゼルは次合う事があったら紫を〆ようと割と本気で決意を固めたとは紫には知る由もないことだった。
そして時は経ち、宴会の時間となると紅魔館の一行は博麗神社へと歩き出す。博麗神社が近くなると魔理沙や魔法の森に住む人形遣いと会ったり、その他にも様々な妖怪たちと出会う。
そして宴会は始まった。

博麗神社に集まった様々な妖精や妖怪、人間などが楽しそうに笑いながら宴会を楽しみ始めた。異変の主犯組であるスカーレット家はというと…。次女のフィーゼルは宴会の奉仕組である咲夜の手伝いをしたりなどをしていたが、レミリアはほかの参加者と一緒にお酒を飲んで楽しそうに話をしているようだった。そんな中1人つまらなそうにしている姿がポツンと1つ。フランドールだ。フランも初めのうちは少しお酒を飲んでいたのだが、全く酔えず、退屈していたのでぼーっとフィーゼルを見ていた。しかし何かを思いついたのか、小走りでフィーゼルのもとへ向かい声をかける。

フラン「ねえねえお姉様。お姉様も一緒に飲もうよ。おいしいよこれとか。」
フィー「そうですね…。分かりました。咲夜あとはお願いします。」
咲夜「分かりました。フィーゼルお嬢様こそわざわざお手伝いしていただきありがとうございます。
フィー「大丈夫ですよ。大変そうなら、また手伝いに行きますのでしばらくよろしくお願いしますね。」
咲夜「ありがとうございます。」
フィー「それで、どれがいいんですかフラン？私も少し飲んでみたいです。」
フィーゼルは家族思いで特にフランに対して甘いのでフランのお願いを割と何でも聞いてしまう傾向がある。
フラン「これこれ。お姉様も飲んでみて。」
フィー「はい。分かりました。」
ゴクッ
これがいけなかった。スカーレット家の父は酒に強かったが母は実はとても酒に弱い。レミリアとフランは父よりなので酒に強いがフィーゼルは母よりなのでとてつもなく酒に弱いのだ。
フラン「…？お姉様大丈夫？」
酒を飲んで以来どこか虚ろに空を見上げるフィーゼルを心配に思いフランが声をかけると、フィーゼルはフランを見つめ優しく微笑む。
フィー「フラン…。」
フラン「…／／／」
フランがその雰囲気に少し照れかけたその瞬間！
???「ハックション！」
近くの参加者が大きな声でくしゃみをしたようだった。
フィー「ひっ…！」
突然の大きな声に驚いたせいなのか先ほどまでの雰囲気は瞬く間に崩壊し急にフィーゼルはぐずりだす。
フィー「フラン。こんな何もできないお姉ちゃんでごめんなさい。

でもこんなお姉ちゃんでもいらないとか思わないでくださいね？」
フラン「え？え？うん。そんなこと思うわけないよ。？…それよりも一回水を飲んだ方が良いと思うよお姉様。」
フランはフィーゼルの急な態度の変わりように若干困惑するが、姉の身を案じ水を進める。ここからがフィーの黒歴史となりうる最悪の失態の始まりだった。
フィー「大丈夫です。別に私は酔っているわけでは無くてフランに要らないと思われたくないだけなんです。なので水いりません。」
フラン「お姉様落ち着いて？ほら一回水飲んで？私要らないなんて絶対に思わないから。」
フィー「そんなこと言って要らないとか言われたら私泣きますからね？水を飲めばいいんですか？はい。」
フラン「それ水じゃなくてお酒だよお姉様！」
フィー「ふぇ!?…ヒック……なにいってぇるんですか？どうみたあってみずじゃああなあいですか。…ヒック。」
フラン「もう何言ってるの？それはお酒だよお姉様。」
フィー「こんなとうめいなんだからあ、みずですっで。もーうフランはおっちょこちょいですねぇ。…ヒック。」
フラン「もうお姉様ったらのみ過ぎだって！」
まだ二杯しか飲んでいないのだが余りの酔い用につい声が大きくなってしまうフラン。それに驚いたフィーゼルによって状況はさらに悪化してゆく。
フィー「う。うううううう～～～～～。そんなおこらないでくだしゃい。ふぇぇフラン～。みてみて？私は誰でしょう？フィ～ゼルでした～～～～!!ヒック…。にゃ～んちゃて…？」
フラン「いったん落ち着いてお姉様。」
フィー「んぅ？フラン？わざわざぁ…ヒック…ありあとうございまあう…ヒック。」
フラン「もう落ち着いた？とりあえず水を飲んでお姉様。」
フィー「わかいましたあ～。ところええ～、どうしてフアンがさんにんもいうんですか？」

フラン「……。」
これを聞いてフランは手に追いきれなくなってきていることを自覚し、とうとうレミリアに手伝いを求めた。既にフィーゼルの状況は情緒不安定を通り越してわけのわからないことになっている。ただ、こんな状況ではあるが、こうやってフィーゼルに甘えられるのも悪くはないとも思ってしまうフランであった。
フラン「レミリアお姉様――！ちょっと手伝って！」
フランがそう呼びかけるとレミリアがこちらへやってくる。そしてフィーゼルの状況を見て絶句する…。
レミ「ちょ…。フランあなた何をさせたの？こんなにも酔うまで飲ますなんて…。」
フラン「いや違うのレミリアお姉様。お姉様はお酒を二杯飲んだだけでこうなって…。」
レミ「そ、そんな訳ないでしょ？ま、まあその話は後とりあえず後でじっくり聞くことにするわ。今はとりあえずフィーを寝かせましょう。」
フラン「そうだね…。」
そういいながらフランはあたりをぐるりと見まわす。多くの人がこちらの様子を見て酒の話にしているのが気に食わなかったが、こうなったのも大元は自分のせいなので今はスルーした。フランが探しているのは霊夢だ、博麗神社の一室を借りようと思ったのだ。
フラン「あ、いた。霊夢！」
そう言ってフランは霊夢のもとへ駆け寄るが
霊夢「あら、フランじゃない？どうしたの？」
魔理沙「うぇ～い！フラン！お前も飲むんだぜ！」
その他「うぇ～い！」
こっちもこっちで霊夢以外はかなり出来上がっていた。とりあえず霊夢に事情を話し、一室を借りる許可を得たフランは急いで姉たちの元へ戻るのだが、２人の会話は一向に進んでいなかった。
レミ「ほら！フィー？一回向こうに移動しましょ？」
フィー「なにいってんでしゅかおねえさあ！…ヒック。わあしは…

ヒック…まだまあ、のいたりましぇん！…ヒック。んぅ？フアーン、あなたもおっちにきえ…のみましぇんか？…ヒック。」
フィーゼルの顔はすでに真っ赤で、まともに立つことすらできない状態だ。
フラン「お姉様？部屋を借りたから飲むならそこで飲も？」
フィー「ヒック…わかいましゅた。どおですあ？あっち？そっい？っくしゅん。」
フィーゼルが自力で動けないことはすでに分かっているのでフランはレミリアと協力して運ぶ事にしたようだ。
フラン「レミリアお姉様は足持って！」
レミ「分かったわ。」
レミ&フラ「「せーっの！」」
この時の様子は意外とシュールで酒を片手に笑うものもいれば、心配をする者もいて様々であったが、ちょっかいをかけてくる者はおらず無事フィーゼルを部屋で横にさせることには成功した。横になってもしばらくは喋っていたのだが気が付けばフィーゼルは眠っていた。
フラン「ふ～～。疲れたあ～。」
レミ「まったく…。どうしてこんなことになったの？ちゃんと説明しなさいよ？」
レミリアにそう言われ事の顛末をしっかりと説明したのだがレミリアは何処か信じられないようだった。そこからもフランがレミリアの気に事についていくつか説明をしているうちに、
かなりの時間が経っていたようでレミリアは宴会の片づけのために呼ばれ会場に戻っていった。
そこからしばらくすると――
フィー「う…ん…？ここは…？」
フラン「あ、お姉様起きた？」
フィー「はい。どうしてここにいるのかは覚えていませんが、なぜこんなことになってしまっているかは、おおよそ予測が付きます。フラン。あの…迷惑をかけてしまいすみません。」

フラン「いや…別に迷惑ではなかったんだけど…もとはと言えば私がお酒を飲ましたのが悪いんだし…。それよりも…その…記憶がないみたいで良かったねお姉様…。」
フィー「え…？と、そんなにひどかったんです…？」
フラン「うん。」
フランの返答に少し恥ずかしそうに下を向くフィーゼル。そんな彼女を気遣うようにフランは慌ててフォローを入れる。
フラン「まあでもみんな酔ってたし、きっと忘れてるって。お姉様だけじゃないよ。」
フィー「そうだと…いいんですけれどね…。」
そう言ってフィーゼルはフランに自分はもう大丈夫だという事を伝えるためか優しく微笑むが、
フィーゼルのその薄く微笑む顔を見てフランはさらに顔を曇らせる。今までずっと一緒に過ごしてきたフランだからこそ知るその顔は明らかに無理をしているときの顔だ。
フラン「お姉様、体調の方は大丈夫？」
そう気遣わし気に声をかけるフラン。
フィー「そうですね…。えっと…少しだけですけど…頭痛と吐き気が…。」
これを聞いて、フランはいよいよ先程の考えを確信する。
何故ならいつもの普段通りの体調のフィーゼルであればこのような質問には、必ずと言っていいほど大丈夫という答えが返ってくるのだ。つまり、ここで体調の悪さをフィーゼルが進言するという事は少しなどではなく、かなり悪いのだろうということが容易に推測できる。
見ると顔色もだいぶ青ざめてきていてかなりきつそうだ。
そんなフィーゼルにフランが何か声をかけるよりも先にフィーゼルに声をかけられた。
フィー「フラン、すみません。少しお手洗いに行くのを手伝ってもらえませんか？私一人では少しつらくて…。」
フラン「うん。大丈夫だよお姉様。ほら、手を貸して。」

吸血鬼さながらの回復力で酔いは完全に冷めているようだがむしろ先のお酒のアルコールの影響とそれによる体調の副次的な悪さが重なっているのだろう。その体は小刻みに震え、その手は少し汗ばんでいるが、嫌になるほど冷たい汗だった。このことからもまだ快調ではないことが如実に表されている。

フラン「お姉様、大丈夫？」

もう何度目になるかわからないフランの姉への投げかけにフィーゼルは微笑みで返す。が、波は確実にフィーゼルを蝕んでいるようだ。

フィー「だい…じょうぶですよ。」

そうフランに伝えてはいるがその目尻には涙がたまっている。

フィー「うっ…！はぁ…はぁ…。フラン、すみません。すこし急いでもらえると助かります。」

少し進んだあたりでついにフィーゼルはフランにそう告げる。もう限界は近そうだった。

フィー「うぷ…。」

フィーゼルが手を口に当てた時、トイレはもう既に目前まで迫っていた。フィーゼルはそれを見つけると急いでその中へ駆け込んでいく。残された少女は不安げにトイレを見つめ、姉が出てくるまでそこで待ち続けたのだった。

フラン「もう大丈夫？」

フィー「はい。もう大丈夫ですよフラン。いろいろと迷惑をかけてしまってすみませんでした。」

体調を心配する妹の問いかけに答える少女の顔はまだどこか青い。

２人が戻った頃には宴会もかなり閑散とし始めており、残っているのは酔いつぶれた参加者とそれを介抱する者、主催者組に紅魔館のみんなであった。

レミ「もう平気そうかしら？」

フィー「はい。ここまで回復しましたので、もう大丈夫ですよ。咲夜、初めに言ったことを守れずにすみません。」

咲夜「とんでもありません。フィーゼルお嬢様こそしっかりご休養なさってください。」
レミ「そうね…。フィーは帰ったらしっかりと休みなさい。それと当分はアルコール禁止よ。分かったわね？」
フィー「はい、お姉様。お酒が飲めるようになるまではお酒は控えないとですね…。」
そう言い終えたフィーゼルの視界にどこかそわそわしているフランの姿が映った。
フィー「？どうしたんですかフラン？」
フラン「えっと…。今日はお酒を飲ませてごめんなさい。」
謝るフランの姿は本当に申し訳なさそうで、悲しそうだった。
フィー「気にすることはありません。私が飲めないのがいけないんですよ。それに私もいずれは飲んでいたと思うのでフランが気にすることはないと思います。」
フラン「でも…！」
レミ「大丈夫よフラン。フィーだってそんなに柔くはないわ。そこは信用してあげなさい。それに今は早く帰ることの方が先決でしょう？」
フラン「うん。分かった。でもお姉様、ほんとにごめんなさい。レミリアお姉様も手伝ってくれてありがとう。」
フィー「大丈夫ですよ。」
レミ「気にすることはないわ。」
こうして話は切り上げられ紅魔組は帰投したのだった。
この時のフィーゼルの覚えていない間の事を覚えているのは霊夢、レミリア、フラン、咲夜の四人だけであったらしいそうな。

――――第一章　終

第捌話　「次女の休日」

フィー「ふぁ～。」
朝の7時頃、1つの欠神と共にフィーゼルは目を覚ます。フィーゼルは意外と朝起きるのが速い。紅魔館の中で2番目である。
宴会の日からすでに1週間が経過しており、すっかり体調も元通りだ。
フィー「さてと、今日こそは完成させたい所です！」
最近フィーゼルは魔法の研究をまた始めている。魔法の研究は以前からもしてはいたのだが、少し前までは異変の準備やらで忙しくあまり落ち着いて出来なかったのだ。
ちなみに今開発しているのは重力魔法。生活に役立つような魔法はあらかた開発してしまったので、スペルカードに応用できそうな魔法を開発しているのである。
フィー「パチェは…、まだ寝ているようですね…。となると小悪魔もまだ寝ていそうですね…。重力に関する本の位置を聞きたかったんですが、いないなら仕方ないですね。」
このようにブツブツと独り言を言いながら本を探すこと３０分
フィー「わあっ！」
魔理沙「うおっと！」
本棚の曲がり角で思わぬ人物と遭遇する。
フィー「魔理沙…。また勝手にお屋敷に忍び込んだんですね？お姉様たちに怒られちゃいますよ？」
魔理沙「まあまあそんなお堅いこと言うなって、こんなに本があるんだし少しくらい借りたって文句ないだろ？」
フィー「まあ、文句はないですけど…読み終わったらちゃんと返してくださいね？」
魔理沙「分かってるぜ。」
分かってるぜとは言う魔理沙だが、まだ一度も本を返していない。
そんな魔理沙にフィーは「しょうがないですね…。」と苦笑いしつつも分離されている空間――フィーゼルの能力の応用によって作り出さ

れた異空間――から机やらティーセットやらを取り出し、紅茶を注いで魔理沙に渡した。
フィー「はい、魔理沙。一杯いかがですか？」
魔理沙「有り難くいただくのぜ。」
それを魔理沙は嬉しそうに受け取るとそのまま椅子に座り、フィーゼルと向き合いながら本を開き魔法について尋ねる。
魔理沙「フィーゼル。ここの魔法について教えてくると助かるのぜ。」
フィー「はい。もちろんいいですよ。」
そこまでの頻度ではないが、フィーゼルは魔法を研究している長さで言えばかなりの知識人なので時々このように同じ魔法使いから相談を受けているのだ。もちろんフィーゼルとしても何か新しい魔法のきっかけができるかもしれないので、こういった相談には出来るうる限り乗るようにしている。その方がお互いのためになる上に、フィーゼルのためにもなるからだ。
しばらく話していると咲夜がパチュリーを起こしにやってきた。
咲夜「おはようございます。フィーゼルお嬢様。」
フィー「おはようございます。咲夜。」
咲夜「えっと、何か魔理沙がご迷惑をおかけしたりしてはいませんか？」
フィー「はい。大丈夫ですよ、むしろ魔法の事に関する話が出来てとても楽しいです。」
魔理沙「まったく、この魔理沙さんが迷惑をかけるわけないだろ？」
咲夜の言葉に魔理沙は心外だとばかりに首を振るが、咲夜はその言葉にどうにもカチンと来たようだ。
咲夜「はい？この前紅茶をこぼしてフィーゼルお嬢様の服を汚したばかりのくせになにを言ってるの。フィーゼルお嬢様がお優しいから許してもらっただけで、私はまだ許したわけじゃないわよ？」
魔理沙「うぐ…。ま、まあまあそういえばそんな事もあったよな。」
咲夜に痛いところを突かれたのか、途端に活気がなくなる魔理沙だが、結局は…。

フィー「まあまあ、もう過ぎたことですし、私は気にしていないので大丈夫ですよ咲夜。」
咲夜「フィーゼルお嬢様が構わないのでしたら私は構いませんが…。」
このようにフィーゼルが咲夜をなだめて終わるのだ。
そして咲夜が来たという事は
咲夜「フィーゼルお嬢様、そろそろ朝食のお時間になりますので妹様を起こしに行ってもらえませんか？」
フィー「もちろんかまいませんよ。」
そう。このフランを起こしに行くのが最近のフィーゼルの日課となっている。レミリアに頼まれてから、始まった日課だがフィーゼルがフランを起こしに行くのは、万が一フランが暴れだしたらメイドでは対処できないのとフィーゼルが起こしに行った時の方が機嫌がよくなるからという理由があるが、本人たちはそれを知らない。知っているのは案外レミリアだけだったりする。
フィー「という事なので魔理沙、今日の所はここまでにしましょう。何かわからないところがあれば、また訪ねてください。その時にまた説明しますので。」
魔理沙「分かったぜ。それじゃあ、私は家に戻るとするぜ。」
こうして図書館を後にしたフィーゼルはフランの眠る地下室へと急ぐ。フランの部屋がいまだに地下室にあるのは、本人の希望だからだ。本人曰く、また何かのはずみで暴走してしまったときにここなら、誰も傷つけなくて済むかららしいがフィーゼルはそれに納得いっていない。フランも女の子なんだし、かわいい部屋を与えてあげたいというのが、フィーゼルの正直な気持ちだ。しかし何事も本人の意思が尊重されるのでそれは叶わなかったようだが。
そうこうしている間フィーゼルはフランの部屋の前に到着する。
ドアを開け中に入っていくと、そこには大きな天蓋付きのベッドが置いてありそのベッドの上にフランがあおむけに寝ている。
フィー「フラン。もうすぐ朝食の時間ですよ。起きてください。フラン～。」

フラン「ん…お姉様おはよぉ…。」
もうすぐ時刻は9時になろうとしているがフランはまだまだ眠たそうだ。半分寝たような雰囲気を漂わせながらフランはフィーゼルに挨拶をする。
フィー「おはようございますフラン。」
フラン「ん…　」
フィー「ちょ…寝ちゃダメですよ。起きてください。」
フラン「…いや…寝てないよぉお姉様…。」
そういいながらもフランは首をカクン、カクンと揺らしている。
フラン「んっ～～～～!」
フランは大きく伸びをして目を覚ますと、食堂に向かうための身支度を始めた。
フラン「やっぱり朝は辛いなぁ～。どうにも夜だったころの感覚が抜けきらなくて…。ふあぁ～。」
フランが言っているのは異変が終わった後、霊夢たちと喋る事が出来るように、紅魔組が昼夜の生活を逆にしていることだ。
フィー「この間もそう言って寝てたんですから、そろそろ起きないとダメですよ。大体もう1週間も経つんですから、慣れてください。」
そんなフィーゼルの視界にチラッと入った時計が指すのは9時を少し回ったところだ。
フィー「ほらフラン、もう朝ごはんの時間ですよ。お姉様に怒られちゃいます。」
フラン「ん～。待ってお姉様、今行くから。」
そして…。
「「いただきます。」」
全員の斉唱で朝食が始まった。
レミ「二人は今日はどうする予定なの?」
レミリアの質問に吸血鬼の妹は答えを返す。
フィー「そうですね…。私は今日も魔法の研究をしようかなと思ってます。」
フラン「え～。お姉様たまには遊ぼうよ～。」

しかし、フィーゼルの予定に不満を持ったフランが遊ぼうとお願いをする。
フィー「う～ん。私はいいんですが…。」
フィーゼルとしてもフランと遊んでやりたいのはやまやまだが、今の幻想郷での遊びと言えば弾幕ごっこが主流なので、それをやると考えるとフィーゼルはお願いを受けずらかった。なぜならば、いまフィーゼルが研究している魔法こそがスペルカードに組み込まれるわけであり、それを利用して空も飛ぼうと考えているため、魔法が未完成ではろくに戦えないと思っているからだ。
フィー「魔法がまだできていないので、そこまで楽しくないと思いますよ？」
しかして、どうやらフィーの考えていることは外れていたようだ。
フラン「弾幕ごっこがしたい訳じゃないよ、お姉様。私はお姉様と一緒にいたいだけだから。」
フィー「じゃあなにをします？」
フラン「せっかくだし、博麗神社に行こうお姉様！」
フィー「博麗神社ですか？分かりました。」
レミ「博麗神社に行くのね。分かったわ。」
その後、朝食を食べ終わった二人の吸血鬼は支度を整えて博麗神社へと向かう――
□　□　□　□　□　□
霊夢「で。あんたら一体何しに来たのよ…。」
フラン「特に何をしに来たわけでもないけど暇だったから。」
フィー「突然すみません。霊夢。今忙しかったですか？」
何をするわけでもなく訪れたという事実に、霊夢は呆れた表情を見せたため、フィーゼルは霊夢に遅まきながらも、時間があるかの確認をした。丁寧な性格とは裏腹にどこか抜けている部分があるようだった。
だが、霊夢もせっかく来てくれた客人に何も出さず「帰れ」と突き返すほど鬼ではない。
霊夢「別に忙しくはないわ。ただ、うちに来られても特にすること

がないから、聞いてみただけよ。そこに座っててちょうだい。」
フィー「分かりました。」
例え相手が理由なくここを訪れたとしても、もてなすのが霊夢なのだ。さすがに魔理沙ほど頻繁に来られると、態度も素っ気なくなるみたいだが…。
霊夢「少し待ってて、今お茶を出すわ。」
フィー「ありがとうございます。」
フラン「なんか変わった入れ物だね。」
フランの一言に霊夢はどこか驚いたような表情を一瞬見せたが、すぐに納得したような顔で説明をする。
霊夢「まあ、確かにあんたたちが使っている物とは少し違うかもね。というか、飲むものも違うわよ？」
フラン「え!?そうなの!?」
フィー「え!?そうなんですか!?」
霊夢「う～ん…。あんたたちが普段飲んでるのは紅茶でしょ？」
フィー「はい。その通りですね。」
霊夢「私が普段飲んでるのは緑茶って言うわ。紅茶はどちらかと言うと甘い方だと思うけど、緑茶は苦みがおいしさを引き立ててくれるわ。」
フィー「なるほど。苦みが特徴のお茶ですか…おいしそうですね。」
霊夢「どうぞ。」
ごくっ
フィー「おいしい…。とてもおいしいですね。」
フラン「そう？私はこれダメ。にが～い。」
フィー「そうですか？私はちょうどいいと思いますけど…。じゃあ、私が代わりに飲みます。フラン。貸してください。」
フラン「はい、お姉様。」
そういってフランに渡された緑茶をフィーが飲み干し、霊夢に返す。
フィー「はい霊夢。ありがとうございました。とてもおいしかったです。」

霊夢「そう、それならよかったけど。」
フラン「ところで、霊夢って普段は何をしてるの？巫女って異変が起きないと暇じゃない？」
霊夢「そんなことはないわよ。境内の掃除だってしなきゃいけないし、お札の作り直しとか、お祓い棒の新調とかやることはいっぱいあるわよ。」
フラン「意外とあるね…。」
霊夢「それはよく言われるわ。普段の行動に対して、やること意外とあるな。って」
フィー「なにか、大変なことはあります？私達でよければ手伝いますけど。」
霊夢「大変というか、境内の掃除が一番面倒ね。掃いても掃いてもキリがないし。」
フィー「あぁ～。確かに今も落ちてきてますね…。」
霊夢「ああ本当だ。またやり直しね。」
そうグチグチ言いつつ、めんどくさそうに霊夢が立ち上がりかけたその時霊夢に対してフィーゼルが待ったをかけた。
フィー「少し待ってください霊夢。ここは私がやりましょう。」
その言葉に霊夢は助かるわと嬉しそうな顔をしたものの同時に吸血鬼であるフィーの体について心配もしているようだ。
霊夢「でも、傘を持ちながら箒を使うのはかなり至難な業だと思うけど、大丈夫？」
しかし、フィーは得意げな顔で
フィー「まあ、見ててください。」
と告げ、指先を宙に弧を描くように動かした。すると、途端に風が舞い上がり、落ち葉を一か所にまとめてしまう。
霊夢「…。うらやましいわ…。これから毎日来てもらいたいぐらいよ。」
それを見た霊夢は一瞬の間の後、唖然とした顔で羨ましそうにフィーゼルを見つめたが、フィーゼルは申し訳なさそうな顔で謝った。

フィー「この程度しか力になれずにすみません。」
だが、霊夢はそれを当然のごとく否定する。
霊夢「何を言ってんの。十分有り難いに決まってるじゃない。この程度の事すらしてくれない魔法使いもいるし謝る必要はないわ。」
その発言が誰に向けられたものなのかが分かってしまって、フィーゼルは思わず苦笑する。
霊夢「さてと、大分冷え込んできたし、中に入りましょう。お茶を淹れなおすわ。」
霊夢が得意の機転を利かし、お茶を淹れるといったが、それに対する反対意見が1つ。
フランである。
フラン「霊夢待って。もうあの苦いのは嫌なんだけど。」
普段通りの勝手気ままな我儘ではあるが、霊夢は否定をする代わりに困った顔をする。
霊夢「…そんなことを言っても、うちには緑茶しか置いてないわよ。」
フラン「お姉様が持ってるから大丈夫だよ。」
だがそこはフランクオリティー。困ったときは姉に頼るという癖が知らず知らずの間に体に染みついてしまっているようだ。
フィー「仕方がありませんね。霊夢はどうします?」
そして、そんなフランのお願いをフィーゼルが断れるはずがない。フィーゼルは良識ある方だが、お願いに悪意が無ければ大体何でも聞いてしまう。フィーゼルの悪い癖のひとつとも言えるかもしれない。
霊夢「じゃあ、折角だし私もお願いするわ。」
フィー「分かりました。」
霊夢の返答を得て、今朝と同じ要領で紅茶を取り出し入れていく。
――余談だが、この分離空間、実は空間内の法則すら能力を使って分離・改変を行う事が出来るため、幻想郷側の空間とは少々異なった法則となっている。例えば、物体が時と共に劣化していくという世界のルールをその空間内だけは引き剥(分離)がし、全く腐ることも味が落ちる事も無い空間であるとか、重力という事象をその空間(世界)内から分離して全

体が無重力になっていたりだとか、なっている。ただし、このような凄まじく強力な能力がリスクも無しに使えるはずがない。それは、すべての能力保持者に共通していることで、フィーゼルとて例外ではない。フィーゼルも能力によって分離している物・空間・法則などが増えるにつれて、それを処理している脳を主体とした器官にかかる負担も総じて増えるのだ。そのため、フィーゼルが能力の使用を極力控えているのはこういった理由があったのだ。

フィー「はい。どうぞ。」
霊夢「ありがとう。それじゃあ頂くわね。」
フィーゼルが紅茶を淹れ終わり、それを受け取った霊夢は静かに紅茶を飲み始める。
フィー「フランの分も入りましたよ。」
フラン「ありがとうお姉様。」
そう言ってフィーゼルが紅茶をフランに渡すと、フランは先程の緑茶を飲んでいないからか早い勢いで紅茶を飲み干した。
フラン「ふぅ。咲夜の入れてくれる紅茶も美味しいけど、私はやっぱりお姉様の入れてくれた紅茶の方が美味しいと思う。」
霊夢「確かに、とても美味しいわね。淹れ方も上手いし、紅茶に魅力を感じれてよかったわ。」
フィー「そうですか？ありがとうございます。」
そう口々に言われたフィーゼルは嬉しそうにそう返した。

ここでふとある事に疑問を抱いた霊夢が吸血鬼姉妹2人に質問を投げかける。
霊夢「そういえば、あんた達吸血鬼が苦手とする物の中に太陽があったと思うけど、今こうして昼間にうちに来ているわけじゃない？実際太陽に当たるとどうなるの？」
この問いに二人は顔を見合わせ、苦く笑った。
問いに答えたのはフィーゼルだ。
フィー「どうなると言われましても…。むしろどうにもなりません

ね。」
霊夢「…？」
この返答には霊夢も困った顔をする。
フィー「えっとですね、本当にどうにもならないんです。精々火傷するぐらいですね。」
霊夢「…！へぇ～、何にもならないのね…。」
この事実に驚愕を感じた匂いを霊夢は漂わせたが、大きくリアクションをする気はない様だ。
フラン「じゃあ、流水を浴びるとどうなるか知ってる？」
この反応を面白がったフランが今度は自ら問いかける。
霊夢「う～ん…。分からないわ。動けなくなるとしか聞いたことがないけど、実際は微妙に違うんでしょう？」
フィー「人間たちには大まかにしか知られてないんですね。」
フラン「私もそう思った～。でも、なんで私たちの弱点が人間に知られてるのお姉様？」
フィー「昔は、召し使いとして人間を雇って居た頃もあったので、その時に知られたんじゃないでしょうか。」
霊夢「そんな時期があったのね。あんた達ってホントに見かけによらずよね。見た目じゃどう見ても私より年下なのに…。」
フラン「確かに！霊夢、私の方が年上なんだからしっかりと敬ったほうがいいぞ！」
フィー「フラン。年齢だけが全てではありませんよ。」
霊夢「なんだかんだ言って紅魔館ではフィーゼルが一番大人な対応するわよね。レミリアもなかなかではあるけど、フィーゼルには負けるんじゃない？」
フィー「そうですか？私からしてみれば、私なんてお姉様に比べればまだまだですよ。」
霊夢「ほらそういう謙遜をするようなところとか。レミリアは絶対にそんなことしないじゃない。」
フラン「でも、支配者たるもの謙遜ばかりしていてはダメって前レミリアお姉様言ってたし、そこを意識してるってのもあるかもね。」

霊夢「あぁ～どうりでレミリア上から話してくると思ったわ。まあ話がサクサク進むから別にいいんだけど、たまにはした方が良いんじゃないかしら。」
フィー「それはあるかもしれませんね、お姉様にも言ってみます。」
そんなこんなで昼食を摂ったりしつつ、他愛もない話をしていると、気が付けばすっかりと空はオレンジ色に染まっていた。
霊夢「そろそろ帰った方が良いんじゃないかしら？世話好きのメイド長が心配するわよ。」
外を見ながらからかい口調で霊夢はそう告げる。フィーゼルとしてもそろそろが切り上げ時と感じていたのでその話に乗ることにした。
フィー「そうですね。そろそろ時間もいい頃合いですし、帰りましょうかフラン。」
フラン「…。」
フィーゼルがフランに声をかけるもフランからの返答はない。どうやら、いつの間にか疲れて寝てしまっていたようだ。
霊夢「紅魔館まで送りましょうか？」
フィー「大丈夫ですよ。わざわざありがとうございます。」
霊夢に礼を言いつつ、フランを背中に負ぶったフィーゼルは、フランが傘からはみ出ないよう慎重に帰っていく。霊夢は、その光景を若干不安げながらも見送ったのだった。

第玖話　「魔女と次女の共同研究」

「……リー…。パ……リー…。パチュリー！」

パチェ「…ふぁ。こんな朝早くから、なに？」

ここ数十年。すっかり聞きなれた声に呼ばれて、パチュリーは眠たげながらもその眼を開く。その目に映ったのは、いつも通りの服装で、こちらを向いて微笑むフィーゼル・スカーレットだった。

フィー「もう…。今日は魔法を協力して研究するって話をしたじゃないですか。…忘れていたとかではないですよね？」

それを聞いて、覚醒しきれていない頭が約束をしていたという事を遅まきながらに思い出す。

パチェ「…ええ。忘れていたわけではないわ。」

今ちょうど思い出したパチュリーだが、ここは忘れていたわけではないと自分に言い聞かせあえて嘘をつく。

フィー「ならいいですが…今日の体調は大丈夫ですか？」

パチェ「大丈夫よ。支度をしてから行くから先に行っていてちょうだい。」

フィー「分かりました。何か必要な物はあります？」

パチェ「特に無いわ。」

フィー「そうですか。分かりました。来ないのは無しですよ？」

細かなやり取りを終えた後、レミリアと同じ幼き友人をパチュリーは見送った。

そして、よいしょ。などと見た目に反するような仕草で起き上がった魔女は身支度を始めたのだった。

□　□　□　□　□　□

今日の目標は、酒を飲んでも酔わない魔法を作る、だ。

やはり、フィーゼルとしては皆と一緒に楽しくお酒を飲みたいと思っている。ここ５００年近く家族と過ごし、少ししか友人が出来ていないフィーゼルにはお酒という円滑剤を挟んだ集まりなどほとんどなく。参席していたとしてもお酒には触れないようにしていたた

め、笑い合いながら美味しいお酒を飲むというのは、とても憧れる。夢をかなえるためにもこの研究は避けては通れぬ道だ――ちなみに、沢山飲んで慣れるというやり方をフィーゼルは絶対に受け付けない。

フィー「パチェ、それで具体的には何の魔法を主体にしたらいいと思います？」

早速魔法作りに取り掛かるため、フィーゼルは最重要ともいえる事を単刀直入に切り出す。

パチェ「そうね…。」

そう聞かれたパチュリーは少し考えこむ素振りを見せるが、

「というかそもそも絶対に酔えないようにする魔法なんて不可能なわけだし、出来て精々アルコールの回りを遅くするのが限界なんじゃないかしら。」

残念ながらと、そもそもを否定する。

フィー「むぅ～…。ですよね…。」

それを聞いたフィーゼルは途端に呆れのような、やっぱり…。みたいなどこか憂鬱な雰囲気にそう返す。長い魔法の歴史の中でも酒を飲んでも酔わないようにするなどといった特殊な魔法を研究した者はいない――そもそもそんなものを研究する必要性がなかったとも言える――。フィーゼル自身そんなことはとっくに知ってはいたのだが、もしかしたらと一縷（いちる）の希望を込めて聞いてみただけだった。

「なら酔い方を変えるだけでも考えてみましょう。さすがにあの酔い方はもうこりごりですよ。」

不可能だと分かったなら、考え方の方向を変えてみる。これも魔法を研究していくなら必要といえる技能だろう。防げないなら軽減を。作れないなら似たものを。フィーゼルが今まで何度も行ってきたことだ。

パチェ「そうね…。ならアルコールを検知したら、眠くなるように組めば暴走を止められるんじゃないかしら？」

二人で暫く悩んでいるとふと思いついたようにそうパチュリーは代替案を告げる。

フィー「ん～と…。そうですね…。それがいいですかね？」

類似魔法としてはかなりよさげな部類ではあるが、本当はみんなと一緒に飲みたいと考えているフィーゼルにはどうも決めきれないようだった。

魔法というのは、対人、対妖怪用に編み出されたとも言われているもので、現在使われているのはそのほとんどがそれらを応用したものである。なので、パチュリーに提案された魔法も検知は敵の侵入を報せるものを、眠くなるよう仕込むのは催眠の魔法を、それぞれ自分にかければいいだけなので、安全かつ手軽に行える手段であるのだ。しかし、お酒に対しては強くなったりなどしないので、本当に暴走するのを防げるだけとも言える。

まあ、酒の回りを遅くする魔法よりは断然マシといえるだろう…。なぜなら、それは本当に酔うまでが遅れるだけなので、その分動ける状態が長引き結果として多くの酒を取り込んでしまいかねない。それは、単純にアルコールの摂取量が増え、自らを危険にさらすだけの愚かな行為だ。それはフィーゼルが吸血鬼だとしても同じことである。

パチェ「フィーはどうしたいの？」

パチュリーはフィーゼルにそう質問を投げかける。相談を受けた友人からすれば、本人の意思を尊重するのはとても大切で必要不可欠なものだ。これを怠れば、たちまち仲が決裂してしまうこともそう珍しくはない。親しき中にも礼儀ありというように、相手が気の許せる友人だとしても横暴な態度をとることは関係が疎遠になる大きな原因だ。それを考えないパチュリーではない。

そんなことはさておいて、先の問いからすでに数分は経過しているのだが、フィーゼルからいっこうに返答がこない。

フィー「…。」

パチュリーが見た限りではフィーゼルは相当熟考しているようだった。

微妙な静寂が図書館を訪れる。

パチェ「…フィ…」

フィー「あ！そうだパチェ。こういうのはどうでしょうか？」

パチュリーが沈黙に耐えかねて声をかけようとした瞬間、フィーゼルは何かとてつもなくいいことを思いついたかのように、盛大などや顔で、思いついたアイデアを説明する。
パチェ「な…。本当にそれは大丈夫なの？確かにそれは使えば、みんなと一緒にお酒は飲めるようになるかもしれないけど…。何が起こるかはわからないわよ？」
フィー「大丈夫です！そこさえうまくいけば！」
こうして幼き姿をした魔女と悪魔は研究を進めていく…。

――そして。
フィー「できました！」
フィーゼルが嬉しそうにそういうと、
パチェ「ようやくね…。話があってからもなんだかずいぶん時間がかかったような気がするわ。」
対称的にパチュリーはげんなりした様子でそう相槌を打つ。
しかし、パチュリーがそう返すのも仕方がなかった。あの後、構想を変えてからぶっ通しで研究を続ける事丸一日が既に経過している。パチュリーの体調が悪ければ倒れていてもおかしくない作業量である。
フィー「すみません。少し無理を強いてしまいましたね。私が片付けておくので、パチェは先に休んでいてください。」
そのパチュリーの様子に自分が過酷なことを強いてしまったということに気づいたフィーゼルは、そうパチュリーに告げ片づけを始めようとする。しかしそれは叶わなかったようだ。
咲夜「フィーゼルお嬢様。ここは私が片付けておきますので、お嬢様も先にお休みください。」
なんとそういいながら咲夜がフィーゼルを持ち上げてパチュリーのところに移動させたのだ。
フィーゼルは納得がいかない様子だ。
フィー「いえ、咲夜気持ちは嬉しいですが、私たちが使ったものですしここは…。」

そしてなおも食い下がろうとするが
フィー「あ…。」
ふと、パチュリーと目が合った。その目は少し呆れながらも怒っているようにも見えたのだ。
しかし理由がわからない。
フィーゼルが理由を考えているとパチュリーが口を開いた。
パチェ「フィー。私よりも、あなたのほうが顔色悪いわよ。」と。
フィー「…。分かりました。咲夜、申し訳ないですがあとはよろしくお願いします。」
フィーゼルとしてはまだまだ、動けると思っているがこれ以上何か言っても結果が変わらないことも、それがパチュリーをさらに怒らせてしまうことも分かっているのでここは素直に諦めることにしたようだ。
□　□　□　□　□　□
フィー「ふぁ～…。」
フィーゼルは目を覚ますと、そっと周りを見回した。外はまだ薄く明るい程度でフィーゼルたちが眠り始めたころよりも少し明るくなっているような具合だった。
その事実にフィーゼルは、やはりそこまで疲れていなかったんだと考える。
ベッドから起き上がり着替えを着て部屋を出ると――
そこにはドアに寄り掛かるようにして眠っているフランとこちらを向いたまま立っているパチュリーがいた。
フィー「えと…おはようございます？パチュリー。」
パチェ「おはようフィー。私たちが眠ってからどれくらいの時間がたったと思う？」
フィーゼルは困惑しながらもパチュリーに挨拶をするがパチュリーは真剣な面持ちでフィーゼルに問う。
フィー「…3時間ほどですか？」
フィーゼルはあり得ないとは思いつつも、窓から見える外の明るさからそう答えたが、パチュリーの答えに驚愕した。

パチェ「惜しいわ。正しくは二日と3時間ね。」
フィー「なっ…。」
まさに驚きを通り越した絶句だった。以前と似た静寂が再びその場に舞い降りる。
なるほど、これはパチュリーが呆れるのも頷ける。
それに、自分の考えが甘かったことを強く感じたフィーゼルはこちらを向いて腕を組み立っているパチュリーに向かって、
フィー「パチュリー。ごめんなさい。」
深々とお辞儀をして謝った。今までにないほどに長い間。
パチェ「…もういいわよ。ただ人の心配ばかりしていないで、自分の身のことも少しは案じなさい。」
暫くすると、パチュリーは微かに笑うような微笑んでいるかのような口調でそう言った。どうやら紅魔館の魔法使いたちに入った亀裂は修復されたようだった。
フィー「ありがとうございます。これからは…自分のことも考えてみるようにもしますね。」
パチェ「そうしなさい。次は許さないわよ。」
フィー「はいっ。」
パチュリーからの忠告にフィーゼルは笑顔でそう返す。そしてパチュリーはまた図書館に戻っていく。残されたフィーゼルはフランを抱え地下室へ向かった。
□　□　□　□　□
フラン「ん…。」
フランはいつもと足の感覚が違う違和感に目を覚ます。
フラン「お…姉様…？」
よく見るとその足の近くですやすやと眠るフィーゼルがいた。どうやら足の感覚がいつもと違ったのは、フィーゼルの頭が当たったからだったようだ。
そのフランの声が聞こえてか、フィーゼルも目を覚ましたようだった。そして謝罪を受けた。フランが止めるまでずっと。どうやら、フィーはここ数日間ずっと会えずにいたことや遊んであげられな

かったことを、悔いているみたいだった。
そしてこれからは今までよりもより一層遊んで上げることを約束しお開きとなる。
一時乱れた日常は時間の経過とともに戻っていく。それは、紅魔の家族のきずなの強さなのか、はたまた、何者かによる力のおかげなのか…。

この後に試された魔法は無事成功したという。

第拾話「人里への買い物」

がやがやとした人々の中、フィーゼルとフランは二人で手をつないでぶつかりそうになるのを上手くかわしながら進む。
そんな二人の姿は質素なローブ着ていて、フードで頭を覆い被った姿だ。お互いの顔が見えるようにそこまで深々と被っている訳では無いが、日の光に当たる訳にはいかないのでズレないよう気を配っているようだ。
二人は今、人里に来ている。
しかし、なぜ二人は人里に来ているのか？というのも、フィーゼルが最近、研究に没頭しすぎて一切構ってやれずとうとうフランに若干ではあるものの拗ねられたのだ。流石に危機感を感じたらしい。

フラン「おね～さま～。今日は何で人里に来たの？」
フィー「たまには、二人で買い物に来るのも趣があっていいかと思ったんですけど…嫌でした？」
フィーゼルの問いにフランはもちろんそんな事無いと否定を入れるが、実はほんの少しだけ遊びたかったなとも思っている。フィーゼルが好きなフランには、そんな事とてもではないが言う事は出来ないが…。
折角人里に行くので、咲夜から頼まれた物を買いながら少し人里を見て回ろうと考えていたフィーゼルだったが要件が終わった後のことを何も考えていなかった。
どうしようかと、一瞬悩みかける。
しかし、また歩き出した事からそれは追々考えようと後に回したようだ。

フラン「それにしても、レミリアお姉様も一緒に来れたらよかったのにね。」
フィー「ですね…。まあ、お姉さまを無理矢理連れて行ったら咲夜達が困っちゃいますし、今回ばかりは仕方ないですね。」

フランの一言に、フィーゼルはそういいつつ曖昧な笑みを返す。
というのも、今回の人里観光、本来は吸血鬼姉妹三人そろってのお出掛けの予定だったのだ。しかし、直前になってレミリアが当主としての仕事をまだ残していていた事が発覚。それを見つけた咲夜達に連れ戻されたという、なんとも残念なオチによって今回レミリアは欠席となっている。いくら何でも、仕事を残したまま出掛けて、後々に咲夜達の仕事が増えてしまうのはメイド達にとってあまりにも理不尽な仕打ちなのでレミリアも渋々諦めたようだ。
折角だし、お揃いの物を買ってお土産に持って帰ってあげようと。心に刻むフィーゼルだった。
そんなこんなで、市場をうろうろとしていると聞き覚えのある声が聞こえた。

霊夢「…ん？もしかしてフィーゼル？」
フィー「あ、霊夢。」
ちょうど肉屋で咲夜に頼まれたお肉を買い終わったところで霊夢と会った。
フィー「ん～。かなり久しぶりですね。」
霊夢「たしかにそうね…。まあ元気そうで何よりだわ。」
フィー「ありがとうございます。何かまた…。？どうしましたフラン？」
霊夢とフィーゼルが話している最中何故かフランがフィーゼルの裾を引いた。フィーゼルが不思議がっていると、さらにフランは強引にフィーゼルを一方後ろへ下げる。
そんな、謎の行動に二人が首をかしげ、頭に「？」を浮かべていると突然霊夢の後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。
「くらえ！霊夢！」
ベシッ！
霊夢「痛っ。」
魔理沙「協力してくれてサンキューフラン。どうだ霊夢参ったか。今朝はよくも追い返してくれたな！」

突然人里を歩く巫女にケンカを売ったのはどうやら巫女の対応に納得のいかなかった魔法使いだったようだ。
得意げな顔をしている魔理沙が油断をしていると
ゴチンッ！
という鈍い音と主に霊夢から渾身のゲンコツをもらう。
魔理沙「ッ～～～～!!」
とても痛そうに頭を押さえている魔理沙を尻目に霊夢は少し怒った顔で
霊夢「それはあんたが、箒で神社に突っ込んで来たからじゃない！」
と文句を言った。それに魔理沙がすかさず「なにおう！」と言い返すが、二人の喧嘩は収まりそうな雰囲気に無いので、フィーゼルはその場を後にするべくフランの手を引く。
フラン「お姉さま止めなくていいの？」
フィー「大丈夫でしょう。二人は仲が良いようですし、何度も私たちが止めに入るのも野暮というものだと思うので。」
その言葉に納得したのかしていないのか、フランはどっちともわからぬ顔で
フラン「ならいっか。」
と一人呟くように言った。

フィー「！…すみません！」
霊夢と魔理沙の二人の元を離れてからまだいくらかも経っていないくらいの時間が流れた頃フィーゼルは髪の長い頭に特徴的な帽子をかぶる…人間？にぶつかったようだ。
相手は女性でフィーゼルの顔を見るなり発した第一声は
???「君！寺子屋に入ってみないかい!?」
というものだった。
フィー「ふぇ!?」
あまりにも急すぎる話の転換にフィーゼルも驚きすぎて変な声が出てしまう始末だが、さらにその女性は続けて話す。
???「ああ、失礼。私の名前は上白沢慧音という。この近くで子供た

ちに勉強を教える寺子屋という場所の教師をやっているものだ。」
フィーゼル「え…えと、その寺子屋の教師さんが私に何の用でしょうか…？」
慧音「いや、だから先ほども述べた通り寺子屋に入ってみないか？見たところ、君ら二人は寺子屋の子たちともそこまで歳が離れていないように見えるし、君らぐらいの年頃なら勉強も楽しいと感じると思うんだがどうだろうか？」
どうやら、彼女はフィーゼルたちを普通の子供たちと思っているようだ。しかし、それも無理はない。彼女たちは今ローブを着ている状態であり、なおかつフィーゼルは羽が無いので、気づける要素はとても限られているからだ。
フィー「残念ですが、私たちは普通の子供ではなく最近こちら側に引っ越してきた吸血鬼です。お気持ちは嬉しいですが、私たちが入ったのでは子供たちに不安な気持ちを抱かせてしまうと思いますし、今回はやめておきます。」
慧音「君たちが噂の吸血鬼だったのか…。」
フィーゼルの告白に慧音はとても驚いた様子を見せているが、その目は諦めの色にはなっていなかった。
慧音「だがそんなことは関係ないさ、うちの寺子屋にだって妖怪の一人や二人はいるし今更そんなことを気にする子はいないよ。なんなら、時間を分けることもできる。どうだろうか？私も無理強いはするつもりはないさ。」
フィー「ですが…。」
慧音「君たちが嫌ならそれでもかまわないが、私としては入ってもらいたいと思っている。」
フィー「そうですか…。そう言う事なら、すこしだけお邪魔させてもらいたいと思います。フランはどうですか？」
慧音の柔らかい物腰や詳細な説明にフィーゼルはもう一度断りを入れようとするが、慧音の真剣な瞳にとうとう折れたようだ。フィーゼルはつづけて、フランに聞いた。
フラン「私は、お姉さまが入るなら入る。けど、勉強がつまらなかっ

たらやめるかも。」
フランの回答にフィーゼルは頷き慧音の目を見て頭を下げる。
フィー「では、少しの間ですがよろしくお願いいたします。」
慧音「ありがとう！これは寺子屋までを示す地図だよ。それと寺子屋内ではできるだけ先生と呼んでくれると助かる。」
フィーゼルの答えに慧音は嬉しそうに寺子屋への道が示された地図をフィーゼルへ渡した。

結論から言うと、フィーゼルは寺子屋に通うのは向いていなかった。というよりも、意味がなかったといった方が正しいだろうか。新しい環境でチルノたち妖精やルーミアといった何人かの妖怪と仲良くなることは出来たが、そこで行われる授業はとうの昔に習い終えた物ばかりであった。しかし、フランにとってはとても楽いものだったようで、フィーゼルが新しく習う物がないと聞いたとき、とても落ち込んでいた。これは、フィーゼルが辞めてしまうと思ってのことだろう。だが、フィーゼルはやめるどころか寺子屋の先生として慧音を手伝うことになったのだ。
かくして、フィーゼルはしばらくの間フランと一緒に寺子屋へ通うことになったのであった。

紅魔館に帰ってからは、レミリアにお土産のアクセサリーを渡して、今日あったことをいろいろと話した。レミリアはそれを興味深そうに聞き、後日様子を見に行くことを決めたようだった。